
Laco ~僕らの運命~

10Time

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Lacoo 僕らの運命

【NZコード】

N7752Y

【作者名】

10Time

【あらすじ】

全ては、俺の所為なんだ。ある時、突然友人が学校に来なくなった。数日後、再び目にした友人は別人で…？主人公は本当の友人を探す為に国内一、人口の多い都市『本都』へ足を踏み入れる。そこで待ち受けていたモノとは…？

時は、よく分からぬ。

何も見えなし、何も聞こえない。真つ黒に染まつた世界。
俺は一人、暗い闇の世界を彷徨つてゐる。

もうあの日には戻れない。

一度と光を見ることはできない。

全部、俺の所為だ。俺の所為。俺の…。

闇の中では忌まわしい記憶しか飛び交わない。
嬉しかつた事、面白かつた事、樂しかつた事…。

それが全て闇へと変わり、闇へ奪われてしまつ。

あの日の日常は夢だつたのか、幻だつたのか、現実だつたのか分からぬ。

今、俺は何をしてゐるのだ？…。

少しずつ現実を取り戻してゐるもの、こんな考えをしてしまう時
がある。

もう戻れない。戻ることはできない。あの日に戻ることはできない
んだ。

そう自分に言い聞かすが、やはり忘れる事はできない。

一番楽しかつた時間を。

もし、この世界に神がいるといつのなら一つだけ願いを叶えてほし
い。

『もう一度、俺に光を叶えてほし』

この願いが叶うといつのなら俺は毎日その願いを思い続ける。
また、光を見るために。

……

薄ら聞こえてきた鐘の音で暗い世界から光の世界へとフロードインする。

どうやら知らないうちに眠りについていたようだ。

黒板には一見、小説のように見えるがそれが小説なのか詩なのか分からぬ文がすらりと書かれている。

現代文か。それを見て一瞬で閃く。

一体どのあたりで寝てしまったのだろう？

担当の矢部春幸^{やべはるゆき}は寝ていたのを気にしなかつたらしい。

起きた時には既に姿が見えなかつた。

どうせノートに写すだけの授業。つまらないと感じてうつ伏せになり、そのまま……。

何となくその眠っている最中、懐かしい頃を思い出していた気がする。

しかし、もう思い出すことはできない。

どうして夢とはすぐ忘れてしまつものなのだろうか。

「うつそお！？ あつははは」

突然、耳に入る女性の声が聞こえたと同時に辺りのノイズが大きくなる。

俺には関係のない話し。クラスのみんなは席を立ち、友達と輪をつくつて話をしている。

休み時間。

周りの話し声が過去を思い返されるようでちょっと切なく、鬱陶しいと感じる。

隣りに座る席の人はいない。空っぽの席。

数日前まで、そこに座っていた人がいた。

優しくて、明るくて、一緒にいると楽しいと思える存在の人。何の相談もなく、突然その人はここへ来なくなつてしまつた。

クラスのみんなはその事を話題にしない。誰も心配していないのだ。もし心配している人がいたとしても、『どうせ風邪でも引いたのだろ』くらにしか思わないだろう。

俺には分かる。なぜ、突然その人は来なくなってしまったのか。それは全部、俺の所為だからだ。

俺は、大切な友人を”助けられなかつた”。

窓側の一番前の席で、頭を抱え込みながら自分の不甲斐なさに嫌気をさす。

席の後ろからは耳に障る嫌な話し声が飛び交つていた。

「あいつ今日も来ねえなー」

「もう来ないんじゃね？」

「そうだな。死んでるかもな！」

ふははははは。

数人の男子がまるで自分に向かつて発しているかのように笑う。俺はその笑い声に腹が立ち、ぶん殴つてやるつかとも思った。しかし、俺にはそのような殴れる勇気がない。

俺は、弱い。

次の標的は自分なんだ。そう感じた。

バーンツー！！

爆弾でも爆発したかの様な大きく耳に響いたその音は、教室のドアを開ける音だつた。

反射的に振り向くと黒板手前の出入り口から金髪に、黒いライダースジャケットとそれに似た色のジーンズを履いた男が教室へ入つてくる。

他に、男の後ろにいた仲間とみられる若者たちもぞろぞろと教室へ入つてくる。

その数、十数人。

この学校は基本指定制服なのでその格好を見れば本校の生徒ではないと一目で分かる。

それから数秒も経たない内に教室内は沈黙と化した。

一番最初に入つてきた男がリーダーなのだろうか。

格好や漂つているオーラからすれば誰もがそう見えるだろう。しかし窓側の席でもあり、その男の顔がよくわからない。

だが、誰かに似ていよいよつた顔つきだ。

男は教室中を見渡す。

その目は遠くからでもわかる、鋭い目つき。

この人たちは一体何者で、何をしにここに？

そう思つたとき、男が小さな声で何かを呟いた。

「殺さない程度にな」

そう聞こえた。離れていても確かにそう聞こえたのだ。

どういうことなのか頭の整理がつかなかつた。その瞬間

「おらあああああ！」

静かな空気に突然、教室全体に響き渡る音が流れる。

それは男の後ろにいた仲間たちが出した声だつた。

男の仲間は一斉に走り出し、特定の男子を捕まえだす。

男子等は、まさか自分たちに来るとは思つてもいなかつたようであつさりと若者たちに取り押さえられた。

「オラッ！」

その声と共に、鈍い音が耳に入る。

運動マットに拳を勢いよく食らわすよつた音。

若者の蹴りや殴りが取り押さえられている男子等に降り注ぐ。

「あうッ！」

男子は抵抗もできなく、無惨にやられていた。

それを間近で見た女子は悲鳴を上げ、混乱に陥る。

特定の男子は殴られ、蹴られ、既に蹲つている者もいた。

「おい。こんなんでくたばつてんじゃねエぞー！」

床に蹲つている男子の襟元を締め上げ、殴る。

数分経つても尚、暴行は収まらない。

若者たちは手加減を知らないのか、容赦ない攻撃を休みも無しに繰り出していく。

「誰か助けうッ！」

助けを求めてこの人数だ。

クラスで一番力の強い男子でも止めに入ることができず、ただ茫然

と見つめることだけしかいられなかつた。

誰もがそうだ。

周りにいるみんなは助けようともせず見つめているだけ。

「「めんなさい。」「めんなさい。」「めうッ……」

男子等はわけもわからず謝り続ける。しかし、そんなのは通用しない。

辺りには赤い液体が飛び散つていた。

この数分で、さっきまで普通だった男子の肌の色が血の色で真つ赤に染まつていた。

それを見た女子は悲鳴を上げながら誰かに助けを求めに行つたり、泣いていたり、顔を背けている者もいる。

自分だつてそうだつた。

あの赤く染まつた顔を見た瞬間、すぐに目を閉じてしまつた。

一体この男たちは何なんだ！？

なぜこの男子等をこれほどまでに痛めつけるのか。

何か悪いことでもしてしまつたからなのか？

！！

ある衝撃が頭の中に走る。

偶然…？ いや、計画的な犯行

。

よく見ると暴行を受けている男子は皆、羽田隆文はねだとかぶみと一緒につるんでいる者だつた。

そこには隆文の姿もある。もしかするとこれは……。

嫌な考えが浮かび上がり、リーダーと思われる男の方へと目を移した。

「！？」

なんだ……？

男は暴行されている男子等の方ではなく、此方に目を向けていた。

「もついいだろ？ そこまでにしどけ」

目が合つたと同時に男は口を開き、若者たちに暴行をやめるよう指

示した。

仲間たちは大人しく暴行をやめ、男の許へ戻る。すると男は威圧的な雰囲気を醸し出し、隆文に近づいて何かを呟く。興味本位で駆けつけてきた野次馬の騒めきがその声を掩き消し、よく聞き取れない。

そして男は呟き終わると隆文のことを数秒見据えて踵を返した。暴行された男子等は鬼を見ているかのようにガクガクと震えている。彼は一体、隆文に何を言ったのだろうか。

そんなことを思つてゐるうちに男の仲間とその男が教室から出て行こうとしていた。

「あつ……」

俺は何故かその男に声を掛けよつかと迷つていた。
誰なのか確かめたい。

目が合つたあの一瞬だけじゃ、よくわからなかつたから。

「ちょっと待つた！」

俺は走り、男に近づく。

もう引き下がることはできない。

声を聞いた男は立ち止まる。

その後ろ姿はやはり似ている。

「勇人……、だよな？」

そう。数日前から学校に来なくなつた春藤勇人の姿に。

勇人であつてほしい。そう心で願う。

そして、男は振り返つた。

「！？」

驚きで何も声が出せず、訳が分からなかつた。

男の表情からは先程のよつた威圧が消えていて、その瞳は凍つたようだ。まるで意識が無くなつた人のような目をしていた。

その目は何を訴えているのかは分からぬが、それが酷い悲しみを背負つてゐるかのように見えた。

「すまん」

「えつ？」

男はそう言つと教室から立ち去つていく。

しかし俺はある瞳を見た瞬間に言葉を失い、何も考へえことができず、男を止める事ができなかつた。

それから数分後、生徒達の悲鳴を聞いた職員が通報した警察が駆けつけてきたが、男等はとつぐに消息を絶つていた。

被害者男子五名。軽傷一名、重傷四名。

重傷者四名については、すぐに病院へ運ばれ意識が回復しているらしい。

これは暴力団による犯行とされ、速報ニュースにもなり警察は捜査をしている。

画面に映つてゐるアナウンサーは「恐ろしい」やら「なぜこんな人がいるのか」などと言つてゐる。

その発言に苛立ちを感じ、テレビの電源を消す。自分の部屋へ移動するビデオへ横たわり、つい先ほどの光景を思い返す。

教室中に飛び散つた赤い色。赤く染まつた顔。後ろ姿。凍つた瞳。俺はあれから男の顔が頭から離れなく困惑していた。

「あの顔はやっぱり勇人だよな……」

つい心の声が表に出てしまつ。

でも、どうして？ 勇人は何故あんなことを？
考へるだけ考へてみる。

「……復讐」

考へて出た言葉がそれだつた。

それしか答えが浮かび上がらなかつたからだ。

「ごめん、勇人」

俺がもう少し強かつたらこんなことには……。

それにしても勇人が見せたあの凍つた瞳にあの言葉は何だったのだろび。

『すまん』

その言葉の意味を考えようとしたが、段々記憶が曖昧になり眠りへ沈みこんだ。

高校入学から1ヶ月後。

「あつ。その小説俺も読んだことある」

それが勇人と交わした最初の言葉だった。

勇人が読んでいたものは人気の本でもないただの小説。しかしその小説には何かを引き付けるものがあり、俺もそれを読んでいたことがあつたのだ。

それからその小説の話を語り合つようになり、他に趣味や話が合つてか友達と言い合える仲になつた。

数ヶ月経つたある日、勇人は俺に不思議ことを言つてきた。

「なあ。俺とあんまり関わり持たない方がいいと思う」

その言葉にどんな意味が込められているのか、俺は分かつてこの数ヶ月で色々な出来事があつたからだ。

俺が分かつていたことも勇人は多分知つていただろう。

勇人は誰よりも人の気持ちが良く分かるやつだったから。

だから俺は、そんな勇人から離れたくないと思い、一緒にいると決めたんだ。

これからもこの先もずっと一緒にいる、と。

予めセツトしておいた目覚ましが鳴り、夢から現実へ意識が戻る。

「夢か…」

過去を思い出してしまった嫌な夢。

ピピピピピピ。

「ああつるさいなッ！」

俺は乱暴に目覚まし時計を叩き、ベッドから起き上がる。

部屋を出る際に外が気になり、窓から外の様子を窺う。

朝だからか少し霧が掛かっている。

その霧の所為でよく判らなかつたが白い綿のようなものが降り注いでいた。

「……雪？」

それは綿ではなく、雪だった。

「ああそうか。もう、冬なんだ……」

その雪を見ていると寂しく感じてしまう。

あと数ヶ月で俺は一年生になるんだ。なんだか実感がわからない。

これから一人でやつていけるだろうか？

勇人のいない学校生活を。一人で…。

「ねえ。昨日学校に暴力団が来たんだって？ それにあんたのクラスだつて言つじゃない」

朝ご飯を食べている最中に母親が話題を持ち掛けてくる。触れられたくなかった話題。

家族なので当然それが話題になる。俺は「うん」と素つ気なく返した。

「なんでそんな人たちが来たんだろう？ その暴力を受けた子たちが何か悪い事でもしたのかしらねえ？」

「俺にも分かんない。……いつてきます」

いつもは残さないご飯を残し、家を出た。

「ふうー、寒つ！」

そう独り言を呴きながら歩く。辺りはしんと静まり返つている。

誰も通らない道。

歩き始めてから数分経つと小さな公園が見えてくる。

いつも通っている道のはずなのに、何となく懐かしいと感じた。

それはいつも隣に誰かがいたことを思い返しそうになつていたから

ながもしれない。

ここから先、いつも一人で歩いていた道なのだ。
でも今は……。

無言の時間。話すにも相手がいなく、学校へ着いた。
教室へ入り、いつもの席へ座る。隣に座るものはいない。
なぜなら隣りは勇人の席だからだ。

勇人が隣りになつたときは嬉しかつた。

嬉しくて授業中も話して先生に怒られたつけ。
それもつい最近のことだったのにな。

そういうえば朝会の始まる時間だというのに、クラスの人数が少し足
りない気がする。

隆文等の姿が見えない。

昨日、あんなことがあつたんだもんな。

チャイムが鳴り、同時に担任の矢部が教室へ入つてくる。

矢部は教壇の前に着くと真剣な表情で口を開く。

「えー、みんなも知つていてると思うが、昨日の件で男子五人と女子
三人は欠席だ」

昨日の件
。

欠席の人よりも先に勇人の顔が浮かんだ。

勇人、今何をしているのだろうか。

何れにせよ警察から逃れていることには間違いない。

男子五人　。昨日暴行された人たちだ。女子は……、良く分から
ない。

女子も昨日の件と言つていた。多分精神的にきたのだと思う。そう
考えるのが一般的だろう。

そしてそれから、勇人の噂が校内中に流れた。

奴は犯罪者だ。暴力団の一員だ。など。

俺はそんな噂に苛立ちを感じていた。

勇人の事を何も知らないくせにペラペラ言つてる肩共め。そんなこ
とを心の中で思つていた。

だが勇人の事を一番知らなかつたのは俺だつたのかもしれない。

終業式

勇人の噂は半年程でなくなり、その存在もが消えたかのように忘れ去られていた。

あの事件以来、勇人は学校どころか俺の前に姿を現すことは一度もなかつた。

当然だろう。警察も未だに捜査を続けているらしい。

この時期、そんな話を耳にし少し、嬉しかつた。

まだ勇人は捕まつていない。いや、勇人が完全に忘れられていなくて良かつた。

「では、これにて終業式を終わります」

その言葉と共に長かつたような短い学校生活の一年が終わつた。

それと同時に俺はあることを決心する。

勇人がいないとこんな生活楽しくない。

だから、勇人を探しに行く、 と。

必ず見つけて一緒に高校を卒業しよう。

時は四月に入らうとしていた。

ここは、自分が住んでいる町とは全く逆の世界。人や建物などテレビでしか見たことのないほど無数にある。それは恐怖にも感じた。

もしかしたらここにいるかもしない。いてほしい。

そう心で願いながら俺は踏み入れたことのない未知の世界へ足を踏み入れる。

道を歩いていると自分も兵隊になつてているかのような足音しか聞こえない。

車のエンジン音も足音や人の声で搔き消され、信号音がやつと聞こえるぐらいだ。

しかし何なのだろう。人の多さで前がよく見えない。余所見して歩くと迷つてしまつ可能性がある。

そんなことを考えている内にドンッと人と肩がぶつかる。

「あつ、すいませ」

謝るにも人に流され立ち止まることが許されない。恐い。そう肌で感じ、人のいない所へと走る。

「……はあ……。はあ……」

着いた場所は疲れていてまだ辺りを見渡す気力もない。

規則正しい呼吸をするために何回も息を吸う。

落ち着きを取戻し、腕時計を見ると針はちょうど真昼を指していた。

意外と早く本都に着いたな。これからどうしよう。

顔を上げ、辺りを確認する。

初めての恐怖に焦り、必死に人のいない場所へ走った結果、どこかわからない路地に居た。

ここまでどうやって来たのか……覚えていない。完全に迷子だ。

「はあ…。俺、馬鹿だ」

自分の情けないという感情が口に出てしまつ。

なにあの人の数だけでビビつてるんだ。

もしかしたらあの中に勇人がいるかもしれないのに。

だけどやはり人が恐い。そう思い、来た道を戻るのではなく路地の奥へと進むことにした。

それにしてまだ昼間だといつのに薄暗い。

奥は真っ暗で何も見えない。

闇の世界があるのではないかと錯覚してしまつ。

一步、二歩と歩くたびに表通りのざわつきが遠ざかっていく。

ここはよくテレビなどで薬物の取引などが行われている場所にそつくりだ。

もしかしたらそんな取引の現場に出くわすかもしれない。頭の中はそんなことしか浮かばない。

歩いてから三分くらいすると、この道の出口ひっつき先が見え、歩くスピードを速める。

道を出ると異変に気づき、足を止めた。

妙だ。

目に見えているものは一見すると普通の居酒屋などが並んでいる通り道。しかし、人が一人もいない。

微かに人の声や自動車の走る音は聞こえてくるが、この通りにはそれらしきものが一切ない。

そして、空からの光を防いでるような建物。

路地に入ってきたときに先の見えない闇を作り出していたいたのはこの所為だったのか。

今通ってきた路地よりも暗く感じるこの場所がどういうところなのか頭の整理がつかなかつた。

並んでいる建物は居酒屋ばかり。それも、どこも明かりがついていない潰れた店。

多分ここは数年前までは盛んな通りだつたのだろう。見た限りで

そういうところだったというのがわかる。

しかし今は人の気配もない。

薄気味悪い。一秒でも早く出たほうがよさそうな気がする。

再び歩き始めようとした途端、後ろから声がした。

「ねえねえ君！」

反射的に振り返る。

するとそこには男一人の姿があつた。

一人はまだ寒い時期だというのにインナーを着ていない派手な豹柄のベストに黒いカーゴパンツを着た、金髪で筋肉質な若い男。もう一人は服装がウェイターに近い感じで顔の至る所にピアスが着いている銀色の髪をしたビジュアル系な男。

如何にも不良らしいその二人が近づいてくる。

逃げようかと考えたが、追われたら厄介だと思い、足を止める。

「ねえ、君どつから来たの？ もしかして迷子の子猫ちゃん？」

子猫：？

金髪の男が口元をにやけさせながら聞いてくる。

ここで使われている用語が何かだらうか？

いや、確か歌であつたような気がする。

迷子の迷子の子猫ちゃん：。

そういう意味か。しかし、何やら嫌な予感しかしない。

この男たちは一体どこから来たんだろう？ サっきまで人の気配はしなかつたのに。

足音さえもしなかつた。いや、聞こえなかつた。

やはりここは逃げるしかない。それしか何も思いつかなかつた。

「あの、俺急いでるので」

「じゃあ俺たちが道教えてあげるよ。どこに行きたいの？ それか俺たちと一緒に」

男が話している隙みて、勢いよく後ろに足を走らせた。

が。

それは呆気なく失敗する。

「うあッ！」

金髪の男は逃げる事を予測していたのか俺の腕をすぐに掴み、その勢いで地面に思い切り倒れた。

「馬鹿だなあ。逃げようとしてる」とぐらりとわかつてんだよ

「……ツ！」

倒れたときに負った腕に痛みが走る。

そして、黙り込んでいたもう一人のビジュアル系の男が側に近寄り口を開いた。

「それじゃ、逃げようとした罰を下さるとしますかあ。ギヒツ！」

男は不気味な笑い声を出す。

その瞬間、男二人は突然襲い掛かり、金髪の男は両腕を。ビジュアル系の男は両脚を掴み自由を奪う。

俺は体の自由を奪われながらも必死に抵抗しようと我武者羅に体を動かす。

すると、何やら金髪の男はベストの内ポケットから何かを取り出そうとしていた。

「そんなに暴れると、逝っちゃうよお？」

ポケットから取り出されたのは果物ナイフ。それを間近で見せつけられる。

「う……」

果物ナイフは徐々に喉へと近づき、危険を感じて抵抗するのを諦めた。

「そうそう。子猫ちゃんは大人しくしないとなあ。キヒツ」

男は両脚に自分の脚を絡ませて固定する。

下肢に違和感を感じ、そこへ視線を移すとビジュアル系の男が厭らしい手つきで太股を擦つっていた。

「なにして……。やめ……」

男の手は徐々に物の方へと移動する。

「さ、触んなツ！！ 嫌だ！」

こんな経験は人生で一度もないのに恐怖に感じた。

怖い怖い怖い怖い。

犯される。殺される！

「いいねえ。感じちゃつてる？」

金髪の男は、ナイフを喉元に押し当てながらゾワツと来るような声で耳元に囁く。

抵抗することのできないこの状況をどうにかしたかった。

逃げる方法はないのか！？

そう考えるうちに力チャツという音が聞こえ、目をやると銀髪の男の手がベルトを外そうとしていた。

「やめろツ！」

「うつせえなあ。そんなに死にてえの？」

金髪の男は皮膚が切れそなぐらいにナイフを喉元に押し付ける。もう駄目だ。ここで犯されて死ぬんだ……俺……。
誰でもいい。誰か、誰か助けて！

勇人ツ！！

俺は頭の中に思い浮かんだ勇人に助けを求んだ。しかし、ここは人通りが少ない。勇人以前に誰も助けに来る人はいない。もう諦めよう。そう思った瞬間だった

「何してんだよツ！」

どこからか怒鳴るように響いた男の声が聞こえたと思うと、二人の男は舌打ちをしてどこかへ走り去つていった。

恐怖から解放されたからか、安心すると体から力が抜け落ち、俺は起き上ることを忘れていた。

助かった。

すると走る足音が聞こえ、それはすぐ側で止まる。

「おい、大丈夫か！？ しつかりしろ！」

「……ん

誰かに呼ばれ、目を開ける。

なんだか体が宙に浮いているような感じだ。
誰かが俺の背中を支えてくれている。

その支えている手が優しい。

気が付くと目の前にいた男の人と目が合つた。

「大丈夫なようだな。お前、名前は？」

「……航^{ハヤミ}」

てっきり勇人だと思つたが、男の顔は見知らぬ顔だつた。しかし、なんとなく危険を感じないと想い、つい名前を口にした。

「航、か。立てるか？」

男は肩を貸して、航は何とか立ち上がる。

「あ……、ありがとう」

航は礼を言うと、その男の人を見つめた。

よく見ると、顔は整つていて身長は百八十センチはある。明るいブラウンの髪色をしていて、左耳には銀色のステンレスピアス。黒色のY^字マークにそれに合つたジーンズが大人の香りを出している。

男も航の様子を見ていた。そして、口を開くと同時に手を前に差し出す。

「俺は迅速^{ハヤミ}だ」

何かと思つたがすぐに理解し、躊躇いながらもその手を握る。すると迅速は笑顔を浮かべた。

多分、これがこの人独自の挨拶なのだろう。

航は慣れない環境に混乱する。

何やつてるんだろう、俺……。

「で、何であんな奴らに絡まれていたんだ？」

「えつ？！」

唐突な質問にどう答えればいいのかわからなかつた。

「分からない。人のいない場所に行こうとしたんだけど、そしたらここに辿り着いて、さつきの奴らが……」

「ふむ。そーいうことか。んで、ここがどこなのかわかつてることか？」

迅速は叱るような口調で航に訊く。

「……いや」

「そしたら迷子か！」

「別に迷子になつたわけじゃないけど……」

間違つてもいいので何とも言い返すことができなかつた。

「ははっ。別に気に障ることじやねえだろ。迷子は誰にだつてある！ だけどな、ここだけは氣をつけろ！ いや、ここだけでもないんだが」

迅速のその言葉には真剣さが感じ取れた。
しかしそく理解できぬ。ここだけは氣をつけろ！ いや、ここだけでもないんだが

航は気になることを訊いてみる。

「あの、ここってどこなんですか？」

「ん？ ここは夜蝶よがよ一番通りってところだ」

「夜蝶よがよ一番通り？ そこって有名な通りじや……？」

「昔わな。今は色々な事件があつてか誰も寄り付かなくなつた、ゴーストストリートってところだ」

「ゴーストストリート。

ここが、あの有名な……。

それを聞いてわかつた氣がする。なぜそつきの奴らが俺を襲つたのか。

夜蝶よがよ一番通り。

数年も前の話だが、いつの頃からか同性愛者という者たちが集まるような場所になり、国内でも盛んな通りだつたという場所。テレビで時々映し出されていたので記憶に残つていた。

しかし、国内でも有名だつたこの通りがこんなにもなる事件つて一体……。

不意にある疑問が浮かび、訊いてみる。

「どうして迅速はこんなところに？」

「俺か？ うーん……。『人探し』かな」

迅速は顎に手をやり返答する。

何やら答えたくなかったような質問だつたらしい。

別にそれぐらいでいいとかなるとかの話でもないの。」

「さてと。こんなとこにずっと座るのもあれだし、ここから出るぞ」

迅速は話を受け流すように呟いて歩き始める。

「どうした？ 早く着いて来い」

そう言われるが、航は足を前に出せずにいた。

もしさうして迅速を信じたとして、着いていくと何が待ってるのか。またあんな恐怖を味わいたくない。

だから今知り合つたばかりのこの男を信じていいのだからつかと困惑している。

見た限り優しかっただし、助けてくれたけど。でも、どこかわざの奴らと同じなんじゃないかと疑つてしまつ。どうにも決断することができない。

「なあ。無理に信用しようとしたくてもいいんだぞ？ 僕はただお前をここから出してみたいだけなんだ」

迅速は航のそばに寄り、真剣な顔で呟く。

心の内を読まれたようでも驚いた。いや、ただそれが顔に出ていただけなのかもしれない。

「航。俺はお前を襲つたりなんかしない」

その真剣な眼差しに嘘はない。

「…信用、していいんだよね？」

「…つたり前だろ！ そんじゃ、出るぞ」

迅速は笑顔で答え、再び歩き始める。

なんでだろう。迅速なら信じることができたつな気がした。航は迅速の後を着いていく。

先程まで薄暗かったこの道が段々と明るくなつていて。それに、車のエンジン音なども聞こえてくる。

やがて角を曲がると光が差し込んでいる道が見えた。

「着いたぜ」

その言葉と同時にこの闇の道の出口から明るい道へ入った。
太陽の光が眩しく、辺りの色彩がはっきりするのに少し時間が掛かる。

目の前には車が沢山走っていて、人もそれほど歩いている。
薄暗い闇から抜け出すことができたんだ、俺。
まるで奇跡が起こったかのような思いが湧きだす。
元来た道を振り返ってみると人の姿はない。暗く、光を寄せ付けない何かがあるように感じる。

闇の世界。 そう言うのに相応しい場所だ。
上を見上げるとアーチ状の看板があり、そこには『夜蝶通り2』と掲げられていた。

「なあ」

不意に声を掛けられ吃驚する。
振り返ると迅速と目が合つた。

「お前、ここのもんじやないだろ?」

「えつ。ああ……うん」

住んでいる所を聞いてきたのだろう。首を縦に振り返答する。
「どこから来たんだ?」

「來万智」

「來万智……!？」

一瞬だが迅速の眼元がピクツとしたように見えた。

「そうか。わざわざそんな遠くから『』苦労さんだな!」

急に迅速は笑顔になつて喋る。

遠くといつてもこの都市から電車で一時間ほどの距離である。
しかし、來万智と言つた時の迅速の様子が気になる。

「それで、何しにここへ来たんだ?」

「え? あ、いや……」

勇人を探しに来た。 なんて言えるわけもない。

大体、国内で一番人口の多いこの都市で連絡とか無しに人を探すことなんて不可能に近い。

笑われるだけだ。

「ちょっと探検？ みたいな感じで…。ははは」

航は笑いながら誤魔化す。

「一人でか

「そう…だけど？」

「ほお。で、どこへ探検しに行こうとしてたんだ？ 港？ 渋谷？ 千代田か！ それとも台東か？」

なに言つてるのかさっぱりわからない。

迅速の目は何かを見透かしている。

どうやら嘘をついていることが見抜かれていたようだ。

「いや、別に…。ただここに来たかつただけで、何も調べないで来たんだよね。ははっ」

「お前…、変な奴だな」

棘のある言葉が胸に突き刺さる。

すると迅速は顎に手をやり、何かを考える表情を浮かべ出した。数秒すると、「よしつ！」という声と同時にその手はコートの脇ポケットに入る。

「俺がお前を案内してやるー。」

「？」

「遠慮はいらねえよ。どつか行きたい場所あるか？」

本当に案内してくれるらしい。

嬉しかつたが、行きたい場所が思いつかない。

俺はただ勇人を探すためにここへ来たのだから。

「じゃあ、落ち着ける場所」

行きたい場所なんて今は思いつかない。それに、数分前の悪夢がまだ頭に残っていたのでそう答えた。

「落ち着けるとこ？ そんな所に行きたいのか？」

「……うん」

「んー、わかつた。じゃあ着いて来い
そう言われ、航は迅速の後に着いていった。

やつぱつ裡に会えることはできなかつた。
今、何をししているんだ?
生きているよな?
また、会えるよな?
もうこんなこと考えるのがおかしいのか。
やがて、その記憶は途切れしていく。
。

見慣れない場所。

柔らかい感触がする上に、航は仰向けになっていた。
頭には慣れない硬さの枕がある。

ここはベッドの上で、そばには窓があり外の景色がよく見える。
この位置からは黒く染まっている空しか確認できないが、そのおかげで今は夜中だと分かった。

隣には上半身裸の男が横になつて寝息を立てている。その男の後ろ姿は昼に見たことのある背中だ。

航は迅速を起こさないようじてベッドから抜け出し、そばにある窓から外の様子を眺める。

「……すごい」

思わず心の声が表に出てしまつほど、田舎では考えられない光景が航の目を輝かす。

そこには居酒屋やビルの灯りなどがまるでクリスマスツリーを連想させるかのような光が沢山輝いていた。

明るい所為か星は見えない。だが、街に点々とするネオンの光が航の心を落ち着かせる。

落ち着く場所に行きたい。そう願つた。

あれから向かつた先は、落ち着く場所とは正反対の騒がしいゲーグセンターだった。

迅速と何所かズれてるようだと思ったが、そうではなかつたらしい。それから陽が暮れるまで色々なところを案内してくれ、夕飯は居酒屋で済まし、今は高そうなホテルの最上階の部屋にいる。

多分、迅速はこの夜景を見せたかったのだろう。本人は酔つていたのか部屋についた途端、服を脱ぎ出しベッドへダイブ。すぐに寝てしまった。

だけど、ちゃんと願いが叶つたんだ。落ち着ける場所に行きたい

とこう願いが。

でも他に何か、……何か願いがあつたような気がする。

「はあ……」

思い出せりふとしてもそれ以上思考が回らなく、溜息が出る。

今日はもう寝よう。明日、その何かを思い出せばいいんだ。

航は部屋に一つしかないキングサイズのベッドへと戻り、横になる。

スー。スー。

すぐ隣で良い夢を見ているんだなと感じとれる気持ちの良い寝息が聞こえてくる。

一体どんな夢を見ているのだろうか。

気持ち良さでここ寝ている迅速の夢の中に入つてみたい。そういう思つた。

迅速の後ろ姿。何か習い事でもしているのか背中の筋肉が鍛えられていて男らしい。

この筋肉質の体に一瞬だけでもいいから触れてみたい。なんとなくそんな願望が生まれた。

相手は気持ちよさそうに寝ているので少しげりには大丈夫だらう。恐る恐る迅速の背中に触れてみる。

感想は、……普通だ。ただ、温かい。

そしてそのまま手を腕の方へと動かした。

すごい。

力を入れているわけでもないのに意外に硬くて驚いた。

しかも肌触りが気持ちいわけで。そんなつるつるな肌にハマつてしまい、航は迅速の腕を何度か擦る。

その時、一の腕辺りらへんに一瞬、変な感触に触れた気がした。また同じ所に触れてみるとやはり何かある。

何だろうと思い、迅速の腕を見てみるとそこには赤黒い傷のようなものがあつた。

記号のエックスの様にも見える。とこうよつこれは傷なのだろう

か？

……駄目だ。。

考えようとしても睡魔が襲いかかり、眠りにつくことになった。

辺りは真っ暗になり、何もない闇に包まる。

「…………」

何となく遠くの方で誰かが俺を呼んでいる声がして、ゆっくりと目を開いた。

辺りは真っ暗で何も映し出されていない。

静穏な空気。今聞こえたものは幻聴だったのかと思わせる。気のせいか と、再び目を閉じようとした時だった。

寝惚けていたからか自分の見ている光景が普通じゃないとこくとに気付く。

視界には黒という色しか映し出されていない。灯りや物、人の影すら。

先程まで隣に誰かが居たような記憶が残っているのだが、それが曖昧で思い出せない。

そんな中、どこからか騒がしい音が聞こえくる。

音は段々とフェードインするように大きくなつていく。

よく耳を澄ますとそれは単なる音ではない。人の叫び声だ。

声の主は一人だけではない。一人……いや、何十人もの叫び声。

その叫び声の所々に呻き声のような声も聞こえてくる。

俺は怖くなり耳を塞いだ。しかし、完全に防げるわけでもなく、まだ小さく声が聞こえる。

今度は目を瞑り、夢だと念じ始めた。

これは夢だ。これは夢だ。これは夢だ……。

次第に叫び声は薄れ、そよ風が持ち運んでいくかのよじこスースと消えていく。

俺は耳を塞いでいた手をそつと離し、周りの音を確認した。辺りは叫び声など聞こえない、静かな空気に戻っている。

もう大丈夫だろうと判断し、目を開けようとしたとき、グシャツ！という音が急に間近で聞こえて吃驚する。

それは、何かを潰したような音で、同時に地面にそれが飛び散る音も耳に入った。

ビチャツ。グチャ！

「！」

音と共に温かい何かが右腕に当たった。

怖かつたが勇気を出して見てみるとそこには赤い……、真っ暗で何も見えないはずなのに、腕に付着したその赤い”血”がはつきりと見えた。

驚きのあまり、声すら出てこない。

不意に地面に飛び散る音の事を思い出し、顔を下に向ける。

「うわあッ！」

そこには予想を上回る程の大量の赤い液体が広がっていた。今立つている前方の辺り一面には真っ赤な血の海が。辛うじてそれは自分が立つている足場までには来ていない。

まだ間に合う。

ここから逃げよとしたとき、どこからか声が聞こえ始めた。薄らだが、それは目の前にある赤い海の中から聞こえてくる。

「……で……け。……けて……いの……」

ノイズが混じっているような声。

喉が枯れた声といった方が正しいのか、その声は段々と近づいてくる。

「……んで……けて……ないの？」

何かを訴えかけているようだが、話し声の途切れ途切れに泡の吹き出すような音が邪魔をして良く聞き取れない。

それを明確にする為に耳を澄まそうとしたとき、赤い海からブクブクと泡がたち始め、数秒もしない内にそこから黒い影が現れ出し

た。

見るとそれは人間^{ヒト}の形をしている。

ただ、全身が黒色で染まっている所為で顔はわからない。だが、その人影は俺を見ていると直感した。

「ねえ…。なんで僕を助けなかつたの?」

今度は鮮明に声が聞こえた。

まだ若い男性の声。どこかで聞いたことのある声だ。

それが、どこで聞いたのか思い出せない。

「僕を…助けないの?」

影はそう訴えかけてくるが、俺にはよく理解できない。

一体、何を訴えたいのだろうか。

「しいよ…、痛いよ。…けて、…助けて!」

「俺にはどうすることもできな…」

「何で…? 何で、何で何で何で」

苦しい声を出しながら何度も黒い影はその言葉を口にする。

「…ごめん」

その影には悪いがそう口にした。

途端、影の顔の部分からギョロリと大きな目が現れ、こちらを睨みつける。

と、同時に金縛りが起こり、身動きが取れなくなる。

まるでギリシア神話に出てくるメドウーサを想像させるかのよう

に。

「や…める…」

少なくとも声は何とか出せるようだ。しかし、身動きが取れないだけでなく、苦しさも感じ始める。

何かで縛られているような感覚。体全体に電流が流れているような感じ。苦しくて、息がしづらい。

「一体、俺が何をしたつていうんだよ」

「……君が悪いんだよ。君の所為だ。君が助けてくれなかつたか

ら僕は…」

影は悲しい声でそう口にする。

もしかすると、この苦しみはこの影が感じている感覚なのかもしない。

すると影は突然頭を抱え込み、苦しみ始めた。

「うあ……ああああ……あ、ああああああああ……！」
「思い出せッ！」

甲高い奇声を発した後、影はキリッといじめを睨み付ける。猫の
ような細い瞳で。

その瞬間、過去の記憶がフラッシュバックした。
楽しい記憶。嬉しかった事や面白かった事。そして、悲しい記憶
。

我に返ると、再び恐怖が蘇った。

「違う。俺の所為じゃない！」

身体が小刻みに震えだす。

影の正体が誰なのか分かつた気がしたからだ。

だけど、それを認めたくはなかつた。だから俺はそう口にした。

「君の所為だ……。ああ、痛いよ……。助けて……、助け

影が訴える最中に突然、ブウンッと勢いのある風の音と同時に
何かが影を命中した。

耳に残る鈍い音が聞こえた途端、影はその場に崩れ出す。

「たす……け、て……」

最後にその言葉を発すると、黒い影は赤い色に染まり始め、海と
同化し始める。

すると、再び前方から叫び声が聞こえ出し始めた。

一体何が起こったのか分からなかつたが、危険だと感じて俺はそ
の場から逃げ出だした。

声のしないところへ。光のある場所へ。

しかし、走つても走つても光なんて一切見えない。

それに、叫び声が追つて来ているような気がした。いや、追つて
来ている。

早く。もつと早くと走るスピードを上げる。だが辺りは真っ暗で何も見えない。何処を走っているのかもわからない。

出口なんてあるのだろうか？ そのままここから抜け出せずに俺もあの影みたいになるのだろうか。そんな考えが脳裡をよぎる。走り出して何分くらいだろうか。体力の限界が近づいてきていた。息が切れそうな中、辺りを見回しながら走っていると、田の先に黒ではない色が浮かんでいるのが見えた。

やつと出口に辿り着いたんだ。

そう思い込み、嬉しさが込み上がる。

だけどそれは絶望へと落とすものだった。

「なんなんだよこれは」

その色を見た瞬間、膝が竦み、地面に倒れ込んだ。そこにあつたのは先程の大量に飛び散った赤い液体。

「もう、終わりだ」

後ろからは叫び声が近づいてくる。

絶望へと落とされ、立ち上がることもできない。

俺、どうなるんだろう。

やがて姿の見えない声の主たちが田の前まで迫り、自分を取り囲む。まるで籠目だ。

すると声が止み、辺りが静かになる。しかし誰かがいる気配は変わらない。

そして背後から誰かが近づいてくる気配がした。地面に金属バットを擦るような音と共に。

殺される。そう確信した。

「ヒイ。

奇妙な笑い声が聞こえたと同時に死を覚悟し、俺はギュウッと田を瞑つた。

静かな空氣に温かいものを感じて、ゆっくりと目を開く。辺りは光というもので明るく、周りの物を鮮明に映し出していた。

航は身体をゆっくりと起いし、溜息をつく。

「夢、だつたんだ……」

また嫌な夢を見てしまつたと、頭を抱える。

最近、悪い夢を見ることが多くなつてゐる気がした。

「…暖かい」

窓の方に顔を向けると、外からの光が照らし出していた。そのおかげか夢のことなどすぐに忘れ、次第に意識を取り戻す。隣りを見るとそこには誰の姿もなく、部屋には自分一人だけ。なんとなく過去を思い返される。

キュツ、キュツ。

部屋の入口辺りから蛇口の止めるよつた音が鳴り、その後にバスルームのドアの開く音が聞こえた。

そこから出でてきたのは腰に白いタオルを巻いた上半身裸の迅速だった。

どうやらシャワーを浴びていたようで、小さなタオルで「じじ」しと頭を拭きながら部屋に戻つてくる。

「おう起きたか。航もシャワー浴びれよ

「えつ。あ……うん…」

航は迅速の姿を見ると安心してバスルームへ向かった。迅速が先に入つていたからか暖かく、良い香りがする。ゆつくりとシャワーの蛇口を捻り、温い水を頭から浴びる。

……良かつた、良かつた、良かつた。

航は水を浴びながら、そう心で何回も連呼していた。

もう誰も勝手に姿を消されるのはごめんだ。

そして、髪や体を洗い流し終わり、バスルームから出る。

迅速は既に私服になつていて、部屋に置いてあるテレビをつまら

なさそうに觀ていた。

ベッドには航の私服が綺麗に折り畳まれてゐる。

「わざわざ折り畳まなくても良かつたのに」

「ん？ ああ、暇だつたしな！」

「……」

これは礼を言つた方がいいのか言わなくてもいいのかよく分から
ない。

航は私服に着替え始める。

「つか、悪いな。落ち着く場所に行きたいっていうからすぐえ良
いもん見せようと思つたんだが…」

着替えている最中、迅速がそう口にする。

「もう見たよ」

「へ？」

「夜景、すごい綺麗だった。それになんとなく気分が良くなつた
し。ありがと」

「お、おう」

まさか礼を言われるとは思つていなかつたようで、迅速は顔を赤
くしながら鼻を人差し指で擦る。

「着替え。終わつたらここから出るわ」

「うん」

航は私服に着替え終わると部屋を出る準備をする。
準備といつてもただ荷物を肩に掛けるだけで後はちょっとベッド

が汚れていたので綺麗に整頓しておいた。

「忘れ物はないか？」

「多分大丈夫」

「多分つて……。じゃあ行くぞ」

迅速と部屋を出て高層のホテルから外へ出た。

日差しが強くて眩しい。まるで夏のようだ。

「なんか欲しいものとかあるか？」

迅速はホテルを出たちょっと先で足を止め、航に訊く。

「今は特にないかな」

「そつか。まあ今日は昨日とは別の場所に案内してやるから、行きたい場所とか見つかつたら言つてくれ」

「そう言つて迅速は歩き出し、航もその後ろに着いていく。

四月に入り、真夏のような日差しの強い太陽が出てこるとこの外を歩く人は皆、厚いコートを着ている。

気温は相変わらず冬のようだ。息を吐くと薄ら白い煙が見える。

春はまだ来ないのか。

歩いてから十五分くらいすると、ショッピングセンターについた。航たちはメンズファッショング専門店がある三階へと向かう。

「それでも柄に合わない服装してるとな」

店に入るなり迅速は航をジロジロ見てそういう口にする。

「別に関係ないじゃん。俺の勝手だし！」

「ちょっとは人の目を気にしろ！ んー、こんなのがいいんじゃないかな？」

「派手すぎ！」

迅速が勧めてきたものは、ヘビ柄に銀ラメのドクロ模様が装飾されているジャケット。

こういうのは普通、ホストか……DQN?の人が着るものだろ？。絶対俺に似合わないし。

人の目を気にしろと言われたものの、逆に迅速のセンスを疑つてしまつ。

「大丈夫だ。髪型を何とかすればいいの！」

「そういうものー？」

航は髪型まで貶されたような気がし、内心落ち込んだ。

「冗談だけどな。……おつ！ これだこれー！」

迅速は選んだ服が似合つか航の目先に出して確認する。

「おお。やっぱこれがピンと来るな！ だろ？」

「まあ、いいと思つけど」

その服を見て航は納得する。

「冗談というのは最初に選んだ服の事も含まれていたらしい。

「それじゃあこれで決まりな！」

「ちよつと待つて！俺、そんなにお金ないし…」

「いいんだよそんなの。これは俺からのプレゼントってことでやつた！ラッキー！」

「つじやなくて…何で、俺に…？」

「んー、そう言われてもなあ」

航は疑問に思った。

なぜ知り合つたばかりの他人に物を買つてあげようとするのか。しかもチラッと値札が見えたが、値段が万を超えていた。

そんなの受け取つても逆に困る。

「服とかはいいから別の場所に案内して！」

迅速の背中を強引に押して、航たちはその店から出た。

数歩先にある案内板の前に立ち止まり、迅速は口を開ける。

「どうか寄りたい場所あるか？」

迅速は案内板を見ながら航に訊く。

ここに記されている中から選べといふことだらう。

しかし、いきなり訊かれてもすぐには答えれない。

航が「んー」と躊躇う中、迅速は何か決まったようで案内板から目を離す。

「航、腹減つてないか？もう十四時だつていうのに俺ら起きてから何も食つてないじゃん？」

「あー、だね。俺もお腹空いてるかな」

お腹を押さえて腹減つてますを伝える。

実を言うと本当はお腹空いてるなんて嘘。

ただ、迅速がそららしいので気遣つたのと、行き場所が見つからなかつた為、そう答えたのが事実だ。

「えーっと…、七階だな」

そうして二人は七階のレストラン街へと向かう。七階へ着くと迅速は「ここにない」「ここもか」などと呴きながら店を探し回る。

「仕方ねえ。ここにすつか！」

そう選んだ店は、高級でもない普通のレストランだった。迅速は高いものが好きなんだとばかり思っていたので意外だ。

店に入り、席に着くと迅速は上着を脱ぎ始める。

「意外と店の中暑いな。あ、俺はもう決まってるから。好きなもん頼んでいいぞ」

航はメニューを取り、確認する。

お腹はそんなに空いていないから軽いものを……と。

「それじゃあこれにするかな」

「おう」

呼鈴を鳴らし、決まったメニューを店員に伝える。

數十分くらい経つと料理が運ばれてきた。

「お前、そんなもんでいいの？」

「小食だからね。いただきまーす」

航は嬉しそうに、頼んだ帆立貝のクリームコロッケに手をつける。しかし迅速は頼んだハンバーグを不満気に見つめていた。

「食べないの？」

「俺さあ、実はカツの方がよかつたんだよね」

口調が微妙にキャラくなっている。

自分から頼むものを決めた上で店に入ったのに、ものが出た後に文句か。

思わず『子供かッ！』と口に出すところだった。

店を探し回っているときにぶつぶつ呴いていたのが分かった気がする。

航はメニューを取り、それらしいものを探す。

「メンチカツならあるよ」

「あー、豚カツじゃないと無理なんだよね」

「いつ 。

食べ物のことになると五円蠅くなるタイプなのか と、心の中で思つた。

「ま、 いつか！ いただきまーす！」

そうして迅速はハンバーグを食べ始める。

航も迅速と食べ終わるタイミングを同じにしてから食事をゆっくりと進める。

そして、食事の中間辺りで迅速は航に質問する。

「そういうばさ、 なんで航は本都に来たんだつけ？」

「えつ？」

不意な質問に困惑。

「き、 昨日言つたじやん」

「だから、 何だつたつけ？」

迅速は質問の答えを質問で返す。

「だから……」

どう答えればいいのだろうか。

昨日言つた言葉を忘れてしまつた。

あれ……？

「どうした？」

航の異変に気づいた迅速は訊ねる。

「あ、 いや……なんでもない。 いいから食べよ！」

「お、 おう……」

再び料理に手をつけた航に迅速は何も言つ返せなかつた。

迅速も同じく残りを食べ始める。

何なのだろう……、 この感じ 。

俺が本都に来た目的を思い出せなかつた 。

辺りには色々な建物が並んでいて一日では見回れない程の店があ

る。

居酒屋、カラオケ店、ゲームセンターなど。

航たちはショッピングセンターから出ると繁華街へ向かうことにして、有名な円舞町に来た。

「すごい人盛り…」

「俺から離れんなよ?」

「大丈夫だつて!」

そういうたもの、ほんと数十歩くらい離れると見失いそうなくらいだ。

だけど並列に歩いてるから心配はないだろ?」

二人はゆっくりと歩きながらそこら辺のものを見渡す。

「色々なものがあるんだなあ」

航は自分の住んでいる町とは全く異なるこの街に感心する。

「大都市の繁華街だしな。何でも揃つてるわ!」

「そうなんだ…」

「あ、そこ左に曲がってくれ」

迅速に言われた通りに左へ曲がると、車一台がやつと通れるような狭い道に入った。

「ここも混雑しているかと思ったがそうでもなく、今来た通りよりは安心して歩けそうだ。」

「航。ここに入つてみるか!」

航は迅速が指差す方に顔を向ける。

「T・I・A・R・A……。ティアラ?」

店の入口上に掲げられている英語を読み上げる。ふと店の前に立っている看板に視線を移した。

指名料一・〇〇〇円、飲み放題三・五〇〇円……?

「なに、ここ…?」

「キヤ・バ・ク・ラ・」

俺の真似ツ !?

「ば、馬鹿! 行くわけないじゃん! 俺まだ高校生だしツ!」

すると迅速は全力で拒否する航を見てゲラゲラと笑い出す。

「はつはつは！ 航…、ここわな？ お空が、真っ暗にならないと入れないんだよ？」

迅速はまだ言つても分からぬ子供に教えるようにジョスチャーしながら話す。

こいつ、こいつッ。

航は眉にしわを寄せて迅速を睨みつける。

「冗談だつて！ 悪かつた」

「… つたく。次また揶揄つたら許さないからな」

「ああ。もう絶対Hにそんなことしない。」ごめんなー！

「や、やめッ！」

ポンッと軽く頭に乗せてきた迅速の手を素早く振り払う。

「人がいっぱいいるんだぞ！？」

「別にいいだろ？ なつ！」

すると、また迅速は航の頭に手を乗せる。

「だからやめッ！」

航は魔の手から逃れるため、速足で歩き出す。

何なんだよ一体…。

迅速は話すたび俺に笑顔を見せてくる。なぜだか俺はその笑顔で虜になりそうだった。

このまま迅速と一緒にいられたら…。そんな思いが心の底から湧いてくる。

「つて何考てるんだ俺」

首を横に振り、我に戻る。

正直、知り合つたばかりなのにここまでしてくれる人なんていいので嬉しかった。

だけどその反面、それが怖いとも感じた。"何か"を忘れそうで

…。

「あつ！ 航、ちょっとここで待つてくれ」

「えつ？」

突然迅速はそう言いだし、『HANSEL』という看板が掲げられた高級感のある店へと入つていった。

「なんだよ… つたく」

仕方なく航はその店の向かい側にある壁に凭れかかる。何となくこの場所にも慣れた気がして辺りを見渡す。

すぐ横は十字路になつていて、道を挟んだ先には『GRETEL』

という『HANSEL』とは正反対のダークな店がある。

特にその店に疑問は浮かばなかつた。

だが目の前には沢山の人、が歩いているといつに『HANSEL』と『GRETEL』の店が挟んでいる道を誰も通らうとしない。

いや、通らうとした人は何人もいたがその道を見ると皆引き返して別の道を歩いていく。

どうして誰も通らないのだろうか？ 少しだけ興味の湧く疑問が浮かんだ。

しかしあれだ。自分でも驚いたが昨日とはまるで違つ。こんな人盛りを目にしても恐怖など感じなくなつていた。

昨日の自分が馬鹿みたいだと心の底で笑う。

これは迅速のお陰だろう。

『HANSEL』に目をやると窓越しに見える迅速は迷つた様子で何かを見つめている。

一体何を探しているのやら

「！？」

不意に隣りの『GRETEL』へ目をやると、そこに見たことのある男がその店から出てきた。

黒いライダースジャケットにそれに似た色のジーンズ。金髪で、遠くからでも分かる鋭い目つき。

何か、……何か忘れている気がする。

男は『HANSEL』と『GRETEL』の間の道に入つていく。その入つていく後ろ姿に過去の光景を思い返され、記憶が甦つた。

「 勇人！？」

男は人が通らない道の奥へと進み、航からどんどん離れていく。このままだとまずいと感じ、まだ慣れてもない人混みの中を搔き分け、男の後姿を追いかける。

そして男はその道の先にあつた角を曲がり、航もそれを追いかけるように曲がる。

しかし、角を曲がると瞬間移動したかのように男の姿は消えている。

なんとしてもその男を見つけようと航はその道の奥へと進む。道には派手な格好をしている者しかいない。

ここは昨日通った夜蝶通りに似ている。

普通の私服を着ている航は逆に目立つ存在らしく、人の横を横切るたびに目をつけられる。

歩いている最中、五人の人影が航の行く手を阻んだ。

「痛ッ！」

その内の一人に突然両腕を封じられて身動きが取れなくなる。

「おい！ なんだよ！ 離せッ！」

封じられている両腕を乱暴に動かすが、相手の力の方が上でビクともしない。

抗っている中、その五人の中で一番存在感のある男が航に近づき、ニヤリと笑みを浮かべて航の顎を掴む。

「なあ僕ちゃん。ここ、どこだか分かつてんの？ 君みたいのが来るとねえ、食いたくなるんだよ……ヒヒッ」

この男が何を言つてゐるのか理解できなかつた。しかし、昨日の悪夢が甦る。

封じられているのは腕だけ。

航は両腕を掴んでいる男の膝を思いつきり踵で蹴る。

「ぐあッ！」

男の手が離れた途端、男たちを搔き分け全力で走つた。

「待ちやがれッ！」

後ろからは狩人が逃げる獲物を必死に追いかける。

航の足の速さは自分でも分からぬくらい全力だったが、相手の方が速かった。

「あう、ツ……」

突然後ろからものすごい勢いが押し寄せ、ドンッという鈍い音と同時に航は地面へ大きく転がった。

それは何回転したのかも肉眼では分からぬくらい酷かった。

「ナイス！俺の飛び蹴り」

どうやら勢いは相手の飛び蹴りだつたようだ。

男はゆっくりと近づいてくる。

逃げようとしても腕に力が入らない。

「馬鹿な猫だな！」

男は足で航の背中を押しつぶし、地面に叩きつける。

「ツ……！」

それは痛いといつものではない。それを通り越し、息を吸うのもままならない程だ。

後から追いついた存在感のある男は地面に倒れこんだ航に近づくとその前に踏む。

すると髪を強く引っ張られ、強制的に顔を上げさせられる。

男の目は普通ではないくらいに見開いていた。

「なあ、俺たちから逃げられるとでも思つたあ？ ばあああかー！」

その瞬間、頬に強い刺激が走る。

一瞬の事で何だかよく分からなかつたが段々頬に痺れを感じ、殴られたことに気づく。

「さあて。これからどうするよ？」

男がそう言つたときだった。

「お前らを殺す」

その男の後ろから聞き覚えのある声が聞こえ、見るとそこには迅速がいた。

「……迅速」

迅速の表情は普通ではない。

怒っているでもなく、脅している……でもない。

これから本当に殺してしまうのではないかと思わせるような目つきをしていた。

「なんだお前？俺たち相手に勝てると思つてんの？」

男等はクスクスと笑い合つ。

すると迅速が足を前に出した。

近くにいた男の顔面にストレート。その横にいた男にはハイキック。

「てめえ、何してんだッ！」

それをみた他の三人は一斉に迅速に襲い掛かる。

しかし迅速は構えのポーズをとり、相手の動きを確かめる。

「オラツ！」

殴りかかってきた男の攻撃を綺麗にかわす。

直後、目の前に棒のようなものが迫る。

それは殴りかかった次の男が出した右脚。

迅速はそれを平然と避け、笑みを浮かべる。

「喰らえッ！」

三人目の男は両手で右、左、右と迅速の顔面を目掛けて殴る。

が、手応えはない。

「次、いいか？」

迅速はその男に向けてそう口にする。

男には何の事かさっぱり分からない。

次の瞬間、男の脇腹に強烈な激痛が走った。

ミドルキック。

当たつた場所は急所だった。

男は受身すらできずに地面へ飛ばされるように倒れる。

「オラアアアア！」

次に襲いかかってきた一人には左脚で突き蹴りし、相手が前屈みになった瞬間、右膝を顔面に噛ます。

反動で男はブリッジを描くように倒れた。

「てめえ…。ブツ殺す！」

残った男はポケットから果物ナイフを取り出し、そのナイフを前に突進を仕掛ける。

迅速もそれに合わせて勢いをつける。

「迅速、危ない！」

危険だと感じた航は叫ぶが、迅速には届かない。

男との距離が一メートルもなくなつたとき、右脚を前へ出した。フェイント。

その脚は相手に与える攻撃ではなく、相手のベルト上に掛かり、もう片方の左脚が相手の左肩に乗る。

そして左脚を勢いよく蹴り、空中へ。

人間は重力に引っ張られるため道具無しでは空中に留まることは不可能。

一階から何も無しで飛び降りるとしたら一秒も掛からない。

迅速はそんな一秒のわずか〇・一の世界で男の急所を確かめる。男は空中へ飛んだ迅速の顔が今まで見てきた中で一番の恐怖に感じた。

背景の陽が黒い影を生み出し、そのギラシとした瞳はまるで……。ギラついた瞳と目が合つた途端、ブンッ！と風の切る音が鳴る。右脚を相手の顎に目掛けて大きく振り上げた。

サマーソルト。

迅速はその勢いで宙を一回転し、地面に着地する。

「クソガ」

その言葉と同時に男も勢いよく地面に背中をついた。

辺りはしんと静まり返る。

五人は地面に倒れたまま動く様子もない。

まるでアニメの戦闘シーンを見ていたかのように思えた。

「大丈夫か？」

迅速は航のところに駆け寄り、航の腕を肩に掛けてその薄暗い通りから外へ移動した。

見渡す限り、緑が生い茂っている。

どうやらここは公園らしい。

それにしても巨大な公園だ。

田舎の來万智では考えられない。

航はあれから迅速に連れられてこの公園へとやつてきた。迅速は航をベンチへ座らせるなり、「はあ」と溜息をついて、怒鳴り声を上げた。

「何やつてんだよッ！ 待つてろつていつただろうが！」

「だつて勇人が」

「勇人？！」

しまつた。

言い訳をしようとして、つい言葉を漏らしてしまった。

しかし勇人と口にした途端、急に迅速の表情が変わった。それは、何かを知つているよつな……。

「痛ッ！」

さつき男に吹つ飛ばされたときに負つた腕の痛みが今になつてまた痛み始めた。

「ちよつと待つてろ。今薬局行つてくるから」

迅速はそう言つと走つて薬局を田指していった。

航は痛みのある腕を押さえながら椅子の背に凭れる。痛みを和らげるため、自然の音を聞こうと耳を澄ます。

サアアーー。

どこからか滝の流れる音がする。

鳥の声や草木の靡く音。

痛みの事なんてすぐに忘れることができた。けれど、勇人という名前を出したときの迅速の様子が気になる。

あれは、絶対に何か知つてゐるよな……。

「絆創膏買つてきた」

「びつくりしたあ」

もう少し時間掛かると思っていたので、こんな早く戻ってきた迅速に吃驚する。

どうやら迅速は走つて来たようで、息をハアハアと吐いていた。

「走つていかなくとも良かつたのに」

「んなわけいくか！ ちょっと腕貸せ」

すると迅速は強引といつていいのか、航の右腕を掴み、袖を捲りだす。

「つか。もう癌になつてやがる」

迅速は小声でそんなことを口にしながら傷があるといひて絆創膏を貼りつける。

「ひつちもか？」

右腕の手当が終わるとそう問い合わせられた。

しかし、答える前に迅速はもう片方の左腕を掴んで袖を捲り、絆創膏をつける。

「これでよしつと…。もしかしてお前、脚も怪我してるんじゃないか？」

「いや、大丈夫だよ…」

「いいや、念のためだ。ちょっと見せや」

そして迅速は脚までも見てくれた。

この人にはお手上げだ。何でも見透かされるのだから。

脚に絆創膏を貼りつけてくれる迅速を見ながら航は口を開く。

「ねえ、迅速」

返事はなかつた。

だけど傷の手当では続いている。

話しさは聞いているだろつ。

航は話の続きをし始めようとする。

「勇人のこと」

「知らん」

即答 。

迅速は話しの間に割り込み答えた。

俺が何を訊こうとしたのかを知っていたかのようだ。

だが、迅速は俺を見ていない。

「俺の目を見て答えて欲しい」

「なんでそんなことしないとならん?」

「本当に勇人のこと知らないの?」

航は迅速の言うことを無視して問い合わせる。すると、迅速は突然航を強く抱きしめた。

「な、に……?」

「なあ。そいつのこと、そんなに大事なのか?」

迅速はトーンの落ちた声を口にする。

それは、迅速らしいとは思えない様子だった。

もし、運命が初めから決まっているものだったら俺は知りたい。

この先、どうなるのか。どうすればいいのか。俺は何のために、誰のために生きているのか。それは、時が進めば見えてくるのだろうか。そして、その時はどのように動くのだろうか。

運命とは一体……。

『 なあ、 そいつのことそんなに大事なのか?』

寒い風が吹いて いる公園 。

人気のない場所に 一人は いた。

一人は自分の思ひを寄せようとする人。
もう一人はその思ひに応えることができず、困惑した表情を浮かべる人。

俺は、何のために勇人を追いかけて いる?

何も言い返せなかつた 。

俺にとつて勇人は大事な人なのだろうか?

ただ俺が勇人のこと を思ひ 続けて いるだけ で、 勇人は俺のことどう思つていたのだろうか。

「俺じや、 駄目か?」

「えつ?」

迅速は航に真剣な眼差しを おくる。

「俺ならお前を大事にすることができる。航がそいつにどんな想いがあるのか分からんけど、俺はお前を大事にする。だから、そいつのことは忘れろよ。」

勇人を忘れる……。

果たして忘れるこ とはできるのだろうか?

思い出してしまつた記憶 。

俺は勇人を探すために、会う為にここへ 来たの だ。

「ごめん、 それはできな い」

「どうしてもそいつじやないと駄目な のか? 理由を教えてくれ!」

理由 。

迅速に教えて意味があるのだろうか。 だけど迅速はそれを知りたがつて いる。

教えるべきか 。

「…全部、俺の所為なんだ」

「？」

「高校一年の頃、勇人と俺は仲良しだったんだ。勇人は優しくて、話も合つて毎日が楽しかった。でも、それをぶち壊す奴らがクラスにいたんだ」

「ぶち壊す？」

嫌なところを衝かれ、航は躊躇する。やつぱり話すのをやめようか。

迅速に話しても意味ないじゃないか。でも、それが罪の償いとなるなら 。

「いじめだよ」

「…」

「そして勇人は学校に来なくなつたんだ。全部、俺の所為だ。俺は分かつていたのに勇人を助けられなかつた。恐かつたんだ。大好きだつたのに！」

全て言い切つた後に気づいた。

目から冷たいものが溢れ出している。無意識のうちに泣いていたのだ。

「航…」

そんな航を見て、迅速は優しく抱きしめる。

理由を訊かない方がよかつたのかもしれないと後悔した。

「「じめんな。無理にそんな話させちまつて。辛かつただろ？」

「く…う…。うう…」

「でもな、航。そいつが学校に来なくなつたのはお前の所為じゃ

ない

「違う。俺の所為だ」

航は迅速を突き飛ばすようにして離れる。

「俺の所為なんだよ」

「お前の所為じゃないッ…！」

「やめてくれッ！… どうしてそんなことが分かる？ 迅速、そ
ばにいたわけじゃないのに」

「それは……」

何も言い返せなかつた。

俺は、最低な奴だ。

善人ぶつてるだけじゃないか。

普段は優しくしておきながら、いつにいつときには何も言えない。
相手に突き刺さる言葉を与えるだけ。
なあ、どうやつたらお前を慰めることができる？

分からぬ。

俺にはどうしたらいいのか……。

「航

迅速は航の頭に手を乗せようとしながら、航はそれをすぐに拒否し
た。

「「」めん」

そうしないと勇人のことを忘れるかもしれないから。
つい昨日会つたばかりの迅速の優しさに航の心は揺れ動いている。
恐い。再びそういう感情が出てきた。

もう一度と勇人のことを忘れない！

もし忘れたら……勇人が消えてしまつ気がした。

「わかつた。じゃあ、けりをつけよう

「けり……？」

「もしあ前が本当に勇人のことが好きなら俺はお前を諦める。で
も、そうでなかつたら俺と……、俺と一緒にいてほしい」
迅速は最後の言葉を恥ずかしそうな顔で口にする。
本当に勇人のことが好きなら……。

航は少し戸惑う。

俺は本当に勇人のことが好き……なんだよな？

「俺について来い。勇人のいる場所に連れてつてやる」
「やつぱり。知つてたんだ」

「勘違いするな。」お前の知つてゐる勇人”じゃないかもしないぞ」

「どういう意味だよ？」

「そういう意味だ」

俺の知つてゐる勇人じゃない？

迅速の言つたことがよく分からなくて心の内がモヤモヤする。それから何も話すことのない無言の時間が続き、航は迅速に案内されるがままその後ろについていく。

人ごみを抜け、人のいない薄暗い道に出る。

そこは昨日、迅速と出会つた夜蝶二番通りに似ていた。

その道を入つて少し先にある角を曲がると路地に入り、奥にある階段を上る。

すると、裏通りと言つていいのか、確かに人は沢山いるが車が一台も通つていない道に出た。

やはりここも薄暗い。

全ては高い建物の所為だが、ここにある建物は何のために造られたのだろうか。見るに壁や窓が壊れていて使われていないものだとわかる。

漫画やアニメなどではよく見るが、この国にもこんなところがあつたのが不思議だ。

この国一番の大都市ならではなのだろう。

「俺から離れんなよ」

「？」

無言の時間を解放したその一言が突然のことだつたのでよく聞き取れなかつた。

多分だがそんなことを言つたと解釈し、迅速から離れないように見つする。

「……」

この裏通りに入つてから感じるのだが、気のせいだろうか？道を通るすれ違いざまの人たちが此方を睨んでくるように見ついてい

る気がする。

それは自分に向けられているものなのか、それとも迅速なのか分からぬ。

その所為か安心はできなかつた。
本当に勇人はここにいるのだろうか？ そんな疑問すら浮かんでくる。

まだなの……？

そう言いたかつたが我慢した。
道の角を曲がり、狭い道に入る。
気味が悪い。

今来た道とは違い、人の姿がなく、一人の足音だけしか聞こえない。

無言の時間をどうにかしたかつた。

何か喋ろうか。でも、何を話したらいいのか…。

早くここから抜け出したい。

航は必死に気持ちを抑えて我慢する。

「ここだ」

やつと迅速の口が開かれた。

長かつたと思える狭い道を抜けると、自動車が走れる普通の通りに出た。

だがそこはもう光の世界とは呼べない場所。

自動車なんて走っているわけもなく、人の姿も見当たらない。
道の右側の奥には広場が見える。

迅速はその道を歩き始め、航も後に続く。

奥へ進むと小さな広場へ出た。

その広場には航たちを取り囲むような怪しい店がネオンの光を發して建ち並んでいる。

自分たち以外に人らしい姿はなく、広場の中央にある噴水の音だけが静かに聞こえる。

「ここは？」

「グロウプラザ。」二ひき辺の連中はそう呼んでる
「グロウプラザ……。ここに勇人がいるの？」

迅速に問い合わせるが返答はなかつた。

聞こえてなかつたのだろうか？

航は渋々と後についていく。

そして迅速はある店の前で立ち止まる。

店は全体が緑色にデザインされていて、看板には『Welcome to the Heaven』と掲げられていた。

「行くぞ」

迅速は店の中に入るぞとこう言葉を送る。しかし、店の前には扉らしいものは見当たらない。

航は、どうやって入るのか疑問に思つた。

すると、迅速は店と店の間にある道に入つていく。

後を追いかけると、そこには木でできた階段があつた。

航と迅速はその階段を上り、一階へたどり着く。

着いたところに木の扉があり、迅速はその扉を開いて航と一緒に店の中へと足を踏み入れる。

中は外観よりかなり狭い一方通行のバーだった。

グラス、ボトル以外は全て緑色で装飾されていてなんとも気持ちわる……いや、個性的な感じだ。

しかし狭い。

カウンターの椅子に座ると奥へ進めなくなるぐらいだ。
迅速はそのカウンターにいる店員と話しをし始める。

どこからか聞こえる音楽がその話し声を搔き消し、聞き取れない。
別にどんな話をしているのか興味はないさ。

ところで不思議に思ったことがある。

ここは一階のはずだが下に階段がついていくのだろうか。それに、奥行きが異常に狭い。

階段を上がつてきたときの長さと比べると、店の奥行きはもっと

あつたはずだ。

それなのに何故こんなに狭いのだろうか。

そしてもう一つ。客が一人もいない。

こんな個性的な感じの店だったら客一人いてもおかしくはない。客だけではなく、ここに来るまでの裏通りには人が沢山いたが、この広場には人の姿は見当たらなかつた。

そんなことを考えている内に迅速の会話が終わつたようだ。

すると店員はどこかへ案内する仕草をする。

「航、じつちだ」

そう言われ、店員にどこかへ案内される迅速の後ろに航はついていく。

部屋全体が緑色で装飾されていた所為で気がつかなかつたが、店の奥へ進むと視覚トリックの様に壁と壁の間に隠れていた扉が姿を現した。

「いつてらつしゃいませ」

扉の前に着くと、店員はそう言つて扉を開いた。

その言葉にどんな意味が込められているのかはわからない。

扉の先には下に繋がる階段があり、航と迅速はその階段を下りる。どうやら聞こえてくる音楽はこの下から掛かつているようだ。一階に着くとそこは一階と比べものにならないくらい広かつた。たぶん五十畳くらいはある。

外から見たときよりやけに広い気がするのは気のせいか?

航はそこにあつた光景を疑つた。

目に映つているのは沢山の人の姿。

どれもみんなルーレットやスロットを楽しんでいたり、トランプや賽など賭け事をやつている者もいた。まるでカジノだ。

「驚いたか?」

「う、うん。まあ……」

「ここのは秘密だぞ? 外に情報漏らしたら……。狙われる、とだけでも言つておく」

迅速は途中で何か言つことを躊躇い、違つ言葉に置き換える。

大体理解はできるから「大丈夫」と返した。

そしてその人の間を通つて奥へ進む。

広間を抜けると薄暗くて細い通路に入り、その先に見える古い金属製の扉の前まで歩く。

扉の前へ着くと迅速は躊躇せずその扉を押し開けた。

ギイイイ。

耳に響く音が鳴ると、扉は「オオオン」と音を立て完全に開く。最初に感じ取つたのは臭いだ。そこは体育館倉庫のような臭いがする小さな部屋だった。

その部屋の中央に吊るされているオレンジ色の電球がそこに居る者を照らし出している。

そこには数人の男たちが一つのテーブルを囲つて座つていた。男たちの手にはトランプ。その囲つているテーブルには札束。

どうやらこの人たちも賭け事をしていたらしい。

航はそこにいる数人の男たちの顔を一人一人見ていく。

「なんか用？」

一人の男がそう口にした。

航は目を凝らしてその男を見つめる。

それは、必死に探し求めていた男だった。いや、まだ断言はできない。

男たちは全員こちらを見つめている。

航はどうしたらいいのか分からなくなり、困惑する。

「！？」

突然、頭に優しく”何か”が乗つた感覚がして一瞬混乱した。

優しくて、大きなもの。

その”何か”は、迅速の大きな手だった。

「こいつがお前に話があるって」

「……ふうん。で、なに？」

勇人らしき男がまじまじと此方を見つめてくる。

「話したいことが、あるんだ」

「だったらここで言えよ。それか、ここでは言えない話とか？」

「だっせえ」

男はそう言つと関係のない側にいた男たちまで大声で笑い始めた。
まるでの時みたいな様だ。

「ごめん」

「……？」

「あの時は助けられなくて『ごめん！』

航はそう言つて頭を下げる。

「何言つてんのこいつ？」

近くにいた男はそう言つと再び笑いが起るが、勇人らしい男は
一ミリの笑いも見せずに航を見つめていた。

「おい、勇人？」

「え？ ああ」

やはり勇人なのか。

近くにいた男がそう言つた。

勇人はそばにいた仲間に名前を呼ばれ、その場の雰囲気に戻る。

「勇人。俺のこと、覚えてる？」

航は雰囲気に負けじとそう問い合わせる。

すると勇人の表情が少し固まつた気がした。

「何だよこいつ。勇人知つてるやつか？」

勇人は数秒黙り込み、口を開いた。

「知らねえよ。こんなやつ」

その言葉を聞いた途端、意識がおかしくなるような感じがした。

辛くて、胸の奥が痛い。

何もかもが考えられなくなるくらいに。

「おい。大丈夫か？」

迅速に声を掛けられハツとする。

気づかぬうちにボーッとしていたようだ。

「用が済んだならさつさと出て行つてくれないか？」

勇人の放つたその言葉に航は何も言い返すことができなかつた。

「……ごめん。迅速、帰る？」

「いいのか？」

航は迅速の問いかけを無視して踵を返す。
いや、無視ではない。ただそれ以上何も考えれず、声が出せなかつたのだ。

「……航」

一瞬、小さい声で誰かに名前を呼ばれた気がする。
でもそれは求めていた人の声ではない。すぐ隣にいる迅速が出しだした声だつた。

航は来た道をゆっくりと歩き出す。

「迅速、お前」

「勇人。お前、変わつたな」

迅速は勇人の話を搔き消すかのようにして口を出す。

そして航は迅速とその部屋を後にした。

「またのお越しをお待ちしております」

店員の挨拶と同時に店の外へ出る。

「うひひー！ もうこんな暗くなつちまつて。今何時だ？ オヤ

ジー！」

「……」

「ま、まあ気にすんなよー。つても無理かもしれんけど……」

迅速の言葉は、無音のように航の耳に入らなかつた。

それほどまでに勇人の言つたあの一言が衝撃的だつたのだ。
辺りは既に闇に覆われている。

まるで今の自分のようだ。

俺は、一体……。

「ツ！？」

突然肩に痛みが走る。それは迅速が無理やり組んだ腕の所為だつた。

「ここから出るやーーー！」

「あつ、危ない！」

「大丈夫だつて！」

迅速は暗くてよく見えない階段を肩組みながら降りようとする。その所為……いや、そのおかげで此方に注意を払い、先程の事を少しずつ忘れていった。

辺りは闇に包まれているが、周りにある建物のわずかな光が道先を教えてくれる。

そして迅速と一緒に広場から街へ。街から小さな公園に移動する。公園に着くとそこには誰もいなかつた。当たり前だ。

街灯に照らされたブランコに一人は座り、小さく漕ぐ。

キイ。キイ。

この音がどんなに寂しいものなのか、理解できる人はいるのだろうか？

そんなことを迅速は考えていた。

不意に航が口を開く。

「あれ、俺の知つてる勇人だよな？」

「……さあな」

やつと迅速の言つた言葉の意味が今理解できた。

『お前の知つてる勇人じやないかもしれない』

確かにそうだつた。あれは俺の知つている勇人じやない。でも、勇人なんだ。

最後に言われた言葉が脳裡に甦る。

『知らねえよこんなやつ』

思い出したくなくても思い出してしまう、涙が溢れ出してきた。

「うう……っ」

「お前、良い奴だよ。よく今まで耐えてきたな

迅速は優しい口調で言つ。

航はそんな迅速にしがみつき、泣いた。

忘れない。

こんなに辛いとは思つていなかつた。

今までの思いをぶちまけたい。

誰に？

誰にでもいい。

そばにいる人。

そばには誰がいる？

温かくて、優しい人。

それは、誰 ？

俺の、いつもそばにいた人は…。

眩しくて、温かい。

それは太陽のような光。

過去の記憶がその光によつて呼び起される。

まだ諦めるには早いんじやないか？

やつぱり、勇人に逢いたい。

航は迅速の胸の中で思いつきり泣いた。泣き続けた。

忘れるために泣くのではない。

これから先を歩み続けるために、邪魔な気持ちを流すために泣くんだ。

泣いてからどれくらいの時間が経つたのかは分からない。
けれど、迅速のお陰で気分がスッキリした。

「ありがとう」

「……いや」

迅速は小さな声で返答する。

「でも、『ごめん。やつぱり俺、諦められない』

「……そうか。わかった！ 俺もやれるべきところまで付き合つざ

！」

「迅速……」

「まあ悔しいけどよ。俺がいないとお前、何もできないだろ？」

その言葉を聞いて嬉しくなった。

やつぱり迅速は優しい。

これからも先、ずっと一緒にいたいと思えた。

大切な友人として 。

「 つと、忘れてた」

迅速はジャケットの脇ポケットから何かを取り出す。

「これ」

取り出したものは迅速の手に収まるくらいの小さな黒い袋だった。

「さつき服買ってやれなかつたからよ。代わりに」

恥ずかしい表情を浮かべながら、迅速は航にその袋を手渡す。

「開けてもいい？」

「ああ。気に入るかはわからんがな！」

航はその袋を開けると掌に中身を出した。

出てきた物は如何にも高そうな銀色に輝くリングのついたネック

チーンだった。

「すごい…。これ、高かつたんじゃないの？」

「値段なんか気にすんな！」

「つあ

迅速は航の手からそのネックチーンを取り、それを航の首にかける。

どうしてここまで優しくしてくれるのだろうか。

昨日知り合つたばかりなのに……。

昨日……か。

なぜだか迅速と共にした時間はそれよりも長く感じた。

「おお、似合うなあ！ やつぱり俺の目は正しかつたぜ」

「ありがとう、迅速」

「いってことよ！」

迅速は笑顔で親指を立て、グッドポーズをとる。

航もそれをみて笑顔を浮かべた。

久しぶりな気持ち 。

もう一度とこんな表情は出せないと思つていた。

だけど、出すことができたんだ。

航は久々の笑顔を思いつきり浮かべた。

「おっ。やつと笑顔見せたな！」

嬉しそうに迅速も笑顔を浮かべる。

迅速のおかげだよ。

恥ずかしさもあり、航は胸の内で礼を言ひつ。

「ねえ。このリングって何か意味とかあるの？」

「え！？ あ、ああ気にすんなッ！！」

何故か迅速は顔を赤くする。

「あ、そういうえばお前どうするんだ？ これから泊まるとい決めてるのか？」

迅速は質問を流すように別の話題を持ち掛ける。

しかし……。

日帰りを考えていたので宿泊先のことなど考えてもいなかつた。

「ははーん。その顔は先のこと考えてなかつたって顔だな」顔に出ていたのかは分からぬが言つてゐる」ことが当たつていたので何も言い返せなかつた。

「俺んとこ、来るか？」

「迷惑、じゃない？」

「むしろ逆。一人暮らしで寂しかつたし、だから大歓迎だ！」

「じゃあお言葉に甘えて……」

そうして航は迅速の家へ泊まることにした。

昨年建てられた鉄骨造アパートに汚れや傷はない。

航はその綺麗な一階建ての四戸アパートの前にいた。

一階の一〇一号室のドアに近づくと、センサーライトが反応する。画期的だ。

「汚い家ですがどーぞ。お客様」

「お邪魔…します」

「そう堅くならんくていいって…」

「うん。『ごめん』」

中に入ると良い香りが漂っていた。

どうやら収納棚の上に置いてあつたお香がその匂いの元らしい。玄関は特に汚いわけでもなく、綺麗にされていた。

「ちょっと俺そこの店寄つてくつから中で待つてくれ」

そう言つと迅速は航を残して走つていった。

「自分勝手だなあ」

独り言を呟きながらも靴を脱ぐ。

遠慮なく部屋の中に入ると先程口にしたことは違い、部屋は綺麗に整頓されていた。

しかし、意外だ。

迅速の顔からしてモノクロが好きそうに思えたが、部屋は明るいもので裝飾されていた。

勝手に部屋を漁るわけにもいかず、航は中央にあるテーブルのそばに座る。

何をすればいいのだろう…。

部屋の所々見回すが、やはり綺麗だ。

俺の部屋とは全然違う。

綺麗好きなのかな？

そんなことを考えながら辺りを見回しているヒドニアの開く音が聞こえた。

もう帰つてきたのかと思つたが、部屋に入ってきたのはバスタオルを巻いた上半身裸の見知らぬ男だった。

「うおっ…？ びっくりしたー」

それはこちらのセリフである。

男は目を見開き、小さな声でそう口にした。

しかしそれはすぐに平静を取り戻し、何も気にせず男は近くにあつた冷蔵庫を漁り出す。

航はそんな男を見て混乱する。

迅速、一人暮らしだったって言つてたけど……。もしかして、家を間違つたんじゃ！？

「あのー……」

「つあー！ うめつ！ お前も飲むか？」

男は漁りだした缶ビールを航に見せる。

「いや、結構です」

「そうか」

「あの……」

「んー、何かいいもんねえかなあ」

人の話を聞いてない。

「これでいいか」

男はツマミらしき物と缶を手にテーブルを挟んだ航の前に胡坐を組んで座る。

近くで見ると、たれ目をしてるがそれなりに整つている顔つきだ。スパイキー・ショートの黒髪で、男前な感じ。

「あのー」

「あー待つた！ 今当てて見せる」

またかと思ったが、男は妙なことを言い出す。

何を当てて見せるというのだろうか？

「今お前が思つてるのは、どうして俺がここにいるのか、だろ？」

？」

そういうことか。

どうやら俺の言つた事を当てようとしたらしい。残念ながら当たりではない。が、外れたともいえない。

「ええと、少しあつてるかな」

「なんだよ少しあつて！ まあいいや。俺の名前は誓イチジョウだ。一条誓イチジョウセイ。」

「この家の人と幼馴染つてやうね」

「そう、なんだ」

だからとは言わないと、この家にあがつていたことがわかつた。

「お前は？」

「俺は、ナツハラ夏原航」

「ふーん。航、かあ。スカウトでもされたの？」

「え？」

その時、玄関のドアが開く音が聞こえて迅速が帰ってきた。

「コーウ。良い子にしてたかあ？」

「よつ！」

「つてなんでお前がいるんだよツ！！」

まるでコントのように迅速は家にあがり込んでいる誓にツツコミをする。

「いやあ、うち今ピンチだぞ」

誓は両手を合わせ、申し訳ないといつポーズをして口にする。

「嘘つくな。人気ナンバーツーのお前が何言つてる」

「ああ、ツーだよツー！ ナンバーワンになれないツーだよ！」

「お前少し黙つとけ。ああ、それと金は貸さねえからな」

「なツ！！」

誓はガックリと頭を下げ、それから言葉を発することはなかつた。

「こいつのこととは気にしなくていいぞー、航」

「え、ああ。うん」

なんの話をしてるのか……。

今さつき誓さんの言つたスカウトといつ言葉がその話に結びついてくるが。

「それよりもどうだ！」

迅速の両手には大きなビニール袋が握られており、それを航の前にドサツと置く。

中身が袋の外まで溢れていて確認するまでもなかつた。

袋の中には大量の肉が入つていた。それも高級な物ばかり。

「今日だけ特別に奮発してみたんだ」

「す、すごい。ははは」

全然笑えない。

袋を見るとスーパーで買つたみたいだが、その中の量が容赦ない。

「これ、全部でいくらしたの？」

「ん？ えーとなあ。確か八万だつたかな」

「……」

呆れてどう突つ込めばいいのかわからなく、声すら出でこない。

スーパーの買い物で八万なんて初耳だ。

店の肉を全部買取つてきたのではと思わせる。さわかしレジをした店員も驚いただろう。

なぜ八万円分もの肉を買つたのかもわからない。

そもそも迅速はお金の価値を知らないのだろうか。

「どうした？ 驚いて声も出ないか！？」

「べ、別に。てかこれ今日で全部食べるわけじゃないよね？」

「そうだよ。三人でも今日中には無理に決まつてる。

「当たり前だ！ 食べるに決まつてる！」

これだもん。

大体迅速がどんな人なのかわかつてきた気がする。
航はわざと突つ込みを控え、残つた分を迅速に食べさせようとした。

「そして、このためにもう一つ買つてきた物があるんだ」

迅速はそういうと部屋を出て何やら玄関に置いてあつたものを持ってきた。

「ジャーン！ これぞ焼き肉用の『焼肉屋さんスーパー・スペシャル・ウルトラ・デラックス』だ！ 僕つてなんて準備の良い男なんだ」

「自分を褒めてるところ悪いんだけど、それこのテーブルより少し大きいよ？」

「それがどうかしたか？」

「え……」

迅速のことわかつた気がしたつて思つたけど取り消し。

この男はよく分からぬ。

頼れそうな一面がある反面、こういった天然が混じつていると理

解に苦しむ。

「お皿を置く場所ないから上

ああああああああ！！！！！ とても詫うと思つたか？」

「今言つたしゃん」

〔二〕

凡東は
ご

迅速はヘランタの方に指を指す
明るい黄色のコートノゴ開まつ

暗い黄色の方 ドンが開き、ついで外の様子はわからない
航は閉まっていたカーテンをゆっくりと開いた。

— すげえ だろ? 「

曲をするかのないな口調で用意はそういうの

庭との間にある。

すごいけど、隣りの家の人迷惑じゃない？

「えにすんな
隣りはレーヴの部屋だから

迅速は新指て誓の方は指をさす

卷之三

卷之三

部屋が一つござ

ても稼貢は一倍なんだからな……。

お金持ちは羨ましい。

「ほら、準備すんぞ」

迅速は航の頭にポンッと手を乗せ、庭へ向かう。

いたいた頭に手を乗せなしてほし……

そんなとJNで落を込んでないで一糸は食へまじ、二

1

航は部屋の隅で小さく蹲つている誓に声を掛ける。すると誓は、まるで蜘蛛のよつた歩き方と早さで航に近づき、両手を握る。

「ひいつーー！」

「航くん。君は優しいよ。優しそうなのよー。あの男と違つて」
ビックリした。

誓はそう言つと庭にいる迅速を睨みつけた。

「誰があの男だ。大体お前なんで人の家勝手に上り込んで勝手に冷蔵庫漁つて勝手に酒飲んでんだよ」

「いいじゃねーか。幼馴染なんだし？」

「だから金借りるとでも思つてるのか。つかお前、先月三百だらり？ それどこにいつたんだよ」

「そ、それわだな…。さ、航くん。俺たちも準備しようか！」

迅速の話を逸らすようにして誓は台所に向かう。

自分には関係のない話だが、少し気になつた。

それから三人は準備をする。

テーブルには紙皿にコップ。メインの肉に野菜。そして焼き肉屋さんスープースペシャル・ウルトラ^{デラックス}。

準備よし、と。

「それじゃ、航と出会つた記念に

「ちよつと待つて！」

航は隣りに座つている迅速の話を止める。

「俺と出会つた記念？」

「ああ。お前と出会つた記念にだ」

「なんか、変じやない？」

「変じやねえよ。人と出会つて、その出会つた日を記念にする人はいるだろ？ 赤ん坊が生まれたら生まれたその日が記念になる。それと同じようなもんだ」

「そうなのか？」

ちなみに出会つたのは昨日だけど、まあそつなかもしない。

じついう感じで祝杯されるのは初めてだったから変だと感じたのだろう。

迅速にとつてはそれが普通なんだ。

「はいはーい。そもそも俺も悲しくなるから乾杯しようぜ」「一人だけの会話に弾まない誓は口を出す。

「あつ。ごめんなさい」

「べ、別に。つか、敬語使わんくていい……」

誓は恥ずかしそうに頭を搔きながら言う。

航は笑顔で返した。

そして三人は自分たちのジョッキを手に持ち、上へあげる。

「ほんじゃ、気を取り直して。航との出会いに」

乾杯ッ！

俺たちの出会い。

それは探し求めていた出会いとは違つけれど、嬉しかった。

これから先、一人ぼっちではないのだ。

嘗ては、この国一番の安全と信頼を得られる公共施設だった、ラスティ工病院。

今となつてはその名も口にされない。

何らかのトラブルにより院内は燃え盛る炎によつて何もかもが失つた。

取り残された患者の数は百数名。

救急隊が中に駆けつけた時には既に無惨な光景が広がつていたといふ。

数十年経つた今では、一部の人の手によつて綺麗に修復されている。

中は相変わらず、落ちない黒い炭の所為で辺りは薄暗いが、気にはならない。

まして、この方がここに住み着いている者たちにとっては丁度良いだろう。

一階の奥にある小部屋。

部屋のプレート看板には『特別室』と表記されている。

焦げた跡で真ん中にある字が読めないが、特別室なのだろう。

「寝て、ないんスか」

一人の女性が、その部屋の窓から外を眺めている男性に話しかける。

「ノックぐらいしろよ…」

男は振り向かずとも溜息交じりな声で言つ。

「スイマセン。開いていたもので」

女は気づいていた。

昨夜から男の様子がおかしいことに。

だから確かめに来たのだ。

男は何も口にしない。ただ、晴れた空を眺めている。

「何か、あつたんスか。 勇人さん」
女がそう口にする。

勇人は外を眺めたまま、口を開こうとはしなかった。
何か変なことにでも巻き込まれたのだろうか？
それとも体調が悪いのか。

勇人が気に掛かる女が口を開こうとした時、勇人の口が開いた。

「カレン。 お前は俺のこと、どう思つてる？」

「なつ！ ななんスか急に！？」

不意な質問にカレンは戸惑いを隠せなかつた。
しかし、それは誤魔化す為のものだと気付く。

「一体何があつたんスか」

カレンの強情に呆れた勇人は、やれやれと溜息を吐く。

「昨日、迅速に逢つたんだ」

「迅速さんに…？」

「それも、俺のよく知つてている人を連れてな」
よく知つている人 ？

カレンは思い当たる人物を想像する。

誰だろう？ 思いつかない。

その、よく知つている人といつ言葉が気に掛かる。

「それで、迅速さん何か言つたんスか」

「…お前変わつたな、だつてよ。 フツ、笑えるぜ…。 俺は何も変わつちやいねエ。 あいつが変わつたんだ」

勇人は憎むような声で言つ。

「数ヶ月前の、ことつスよね」

カレンの不意な発言に勇人は固まる。

「あつし気づいてました。 数ヶ月前から二人の様子がおかしくなつたこと。 それに迅速さんが姿を見せなくなつたのも…」
「お前には関係ない！」

勇人はカレンの話を遮断する。

その言い方は怒鳴られるよりも別の、恐いものを感じた。

でも、関係ないはずがないのだ。

勇人は何かを隠している。

この話題は今出しても無駄だろ？

カレンは別の話に切り替える。

「今、あつしらの状況は危険です。何故この状況になつたのかはあつしには分かりませんが、情報が外部に漏れる前に始末しないと……」

「ああ、わかってる。みんな揃つてるんだろ？」

「はい。あとは勇人さんの指示を待つだけです」

「… そうか。わかつた」

そう口にすると、勇人はようやく窓から目を離して振り返った。

勇人と目が合う。

その目は以前とは比べてまるで別物。

鋭い目は仲間であるカレンさえも動搖させるほどものだつた。もしかしたら、もうあの時の勇人ではないのかもしれない。

「明日だ」

「えつ？」

カレンはいつの間にか気を取り乱していた。

「明日、決行だ

「は、はい。了解です」

勇人は指示を出し、部屋から出て行く。

カレンはその背中を見送った。

今日は久々に気持ちよく眠れた気がする。

ゆっくりと目を開くと、一番始めに思つた言葉。

外を見ると朝という感じではない。

ぼんやりとした意識の状態で昨晩のことを思い返す。

焼き肉をして、一通り食べ終わると片づけに入つて、それから部

屋でまた……。

部屋の中を見回すと昨日のことが嘘のようと思える。

そこらへんの床にはゴミが大量に散らばっていて机は飲み物や食べ残し物などでこつぱいだつた。

そんな中、迅速と誓は「みに囲まれながら鼾もかかずに熟睡している。

普通は寝顔を見ると可愛こと思つのだらうが、迅速の寝顔はかっこよく見える。

迅速は一体何の仕事をしているのだろう。

昨日の話からすると、やっぱりホストとか……？

航は迅速の寝顔を間近で見ながらそんなことを考えていた。

「……ん。うわッ……」

「いっ……てえ……」

目を開けると視界を埋め尽くすほど大きな顔があり、迅速はそれを驚いて後ろへ飛び退く。

しかしそこには生憎、誓がいて巻き込んでしまった。

「あ……、なんか」めん

「おいおい、起こすならまつと目覚めの良い起こし方にしてくれよ

迅速は頭を搔きながら言つ。

「それはこっちのセリフだ。……痛い」

起こすつもりはなかつた。と言えばどつ返つてくるのだろう。何にせよ面倒なので口には出さなかつた。

三人は数分程だらだらすると、部屋に散らばつてこら、机の上づけに入った。

昨日見なかつた物まで部屋に転がつてゐる。

一体どこから湧き出てきたのだろうか。

航は一キロ程あるんじゃないかと思わせるほどの大量のゴミを両手にゴミ箱へ捨てる。

「ふう……。あとは掃除機かけるだけだね

「そうだなあ」

「あれ、誓さんは？」

辺りを見回すと誓の姿が見当たらなかつた。

「もう来るんじゃねえか？」

「おまたー」

迅速が言つた直後、掃除機を持つた誓がベランダから入つてくる。
なぜ、掃除機を……。

「おう。サンキュウサンキュー」

「つかあれだ。お前掃除機ぐらい買え！」

「炊飯器のない奴に言われたくないな」

「なつー！」

どうやらこの家には掃除機がなかつたらしい。

迅速は誓が持つてきた掃除機の電源を入れ、床に散らばつている
ものを片づける。

あとは任せればいいか。

航は暇潰しにテレビの電源を入れる。

黒い画面から映し出されたのは、この前やつていたドラマの再放
送だつた。

テレビの横に置いてあるリモコンを取ろうとした時、不意にラッ
ク棚に裏返しされた写真立てが目に入った。

それを手に取り、引っくり返す。

一枚の写真。

知らない制服を着た人たちが並んで写つていた。

その下には3・1中学校卒業と記されている。

どうやら中学卒業のクラス写真のようだ。

写真の人たちは皆、笑つていた。

暗い表情やムスッという表情をした者はいなく、全員が笑つてい
る。

みんな、仲が良かつたんだろうな。

迅速、中学の頃と全然顔が変わつていない。一人だけ大人びてい

る。

誓さんは同じクラスではなかつたのかな？

それにもみんな本当に楽しそうに笑つてゐる。

迅速の隣にいる人も。

「……えつ？」

その顔を見た時、航の口から一言が漏れた。

「なんで？ よくわからない。」

一瞬だけ頭の中が真っ白になる。

「なに見てるんだ？」

航が何を見ているのか気になつた誓は、頭を覗かせるようにして手に持つていた写真を見つめる。

「わお！ 迅速、顔変わつてないな」

「ん？ なに見てるんだ？」

一人して何を見ているのか気になつた迅速は航の手からその写真立てを奪つうようにして取る。

「あつ、馬鹿！ まだ見終つてないつづーのに」

「あー、これが。懐かしいな」

迅速は誓を無視して写真を見つめる。

「迅速、それ……」

航が問いかける。

「これがどうかしたか？」

「その、迅速の隣りにいる人つて……？」

航に言つて迅速は写真に写つてゐる自分の隣りの人物を見る。

「それ、勇人だよね……？」

「……」

返事がない。

迅速の隣りに居たのは勇人だつた。高校の頃とは少し違つが、紛れもなく勇人なのだ。

なぜ迅速は答えようとしないのか分からぬ。その所為で苛立ちが込み上がる。

「答えるよ。隣りにいる奴は勇人なんだろ？ どうして勇人がいるんだ？」

「そうだ。なぜ勇人がいる ？」

航の住んでいる場所は本都から離れた場所にある田舎町。

そこにある高校で勇人と知り合つた。

だから、なぜ勇人が本都に住んでいる迅速と同じ中学校だったのかが分からぬ。

元々勇人は來万智の人ではなかつたということ…？

「もし、この俺の隣りにいる奴は勇人じやないと言つたらお前は信じるか？」

迅速が口を開く。

勇人じや、ない ？」

「ふざけんな！ そいつは勇人だ！ 俺が間違えるはずがない！」

「ちょっと航落ち着いてさ。俺にもよく分からんだけど。どうしたん？」

突然の二人の心境の変化に理解できない誓は、まず航を落ち着かせて何があつたのか迅速に問い合わせす。

しかし、航の感情の変化は異常だつた。

航は誓に抑えられた腕を思いつきり振り払つ。

「勇人じやないつてなんだよ一体……。そいつはどう見ても勇人だろ！」

「だから落ち着いてさ。お前も黙つてないで何か言つたらどうなる？」

「……ああ、すまん。航、お前今高校一年生だろ？」

迅速は冷静な口調でそう質問をする。

「それが勇人と何の関係があるんだよ！ 俺は勇人が何でそこに写つているのかが知りたいだけだ！」

人がここまでおかしくなつていてるといつのに迅速はどうして冷静な態度でいられるのか。

だが、それは俺を苛立たせる行為にしかならない。

迅速は何も答えず、細くした目で航を見つめる。

「さつさと答えろッ！」

我慢できなくなつた航は、今まで出したこともないくらいの怒鳴り声を上げた。

言つてしまつた。

言つてはいけない言動だとは分かつていた。

どうしてここまで怒鳴る必要があつたのだろう。

その言葉を発してからから気づく。

俺は、勇人の事に対して敏感になりすぎていたんだ。

だつて仕様がないだろ？ 勇人の事が『好き』なのだから…。

でも、もつと良い方法があつたはずだ。俺が、迅速に冷静になつて聞くべきなはずだつたんだ。

全部、俺が間違つていたんだ。

「……」

その言葉を聞いて迅速は笑みを浮かべた。

「いや。俺はお前に気付いてほしかつたんだ。お前は勇人の事になると突発的になりやすいからよ。だから、こうするしかなかつたんだ」

「……」

「お前、本当に勇人の事が好きなんだな」

迅速の声には、笑みの中に悲しみが混じつていた。

航は自分の行動を反省する。

さつきまでの自分だと、もう一度勇人にあつてもまた昨日の様におかしくなるに違ひなかつた。

しかし、迅速のお陰で自分を知る事ができたんだ。

自分のいけないところを、自分で見つけ出すことが

「黙つて悪かつた。今からこの事を話すが……。悪いがジョウは一旦家を出でくれないか？」

「なッ！」

「悪い。一人きりで話したいんだ」

「そ、そそそやつていつも俺を！　このッ、バカヤロオオオオ
オオーーーー！」

そう言つて誓は走つて家を飛び出していった。

部屋の中はしんと静まり返り、一人だけの世界となる。

「航。今から話すことは嘘もない本当の話だ。できればその話を
している間、口を挟んでほしくない。それを約束できるか？」

迅速の表情、話し方からしてそれは自分にとつて、きついものだ
と察する。

それでも聞きたい。写真に写つっていた勇人のこと。勇人の過去の
ことを。

今の自分なら大丈夫。そう自分に言い聞かせ、航はゆっくりと頷
いた。

吹き抜ける風は水よりも冷たく、闇へ吸い込まれる。ゲームでいう裏ルートを通りた先にある小さな広場。光から疎遠された闇のそこは、グロウプラザという。ここまで道のりが頭の中に留まつていて良かつた。いや、ここまで来るのに怪しい者に阻まれなくて良かつたというべきか。航はその薄暗い広場にいた。

やはり人の姿は見られない。

噴水奥にネオンの光が点灯している店がある。見当たらない人たちはその店に集まつてているのだろう。というより、何で俺はここにいるのだろう。今さら後悔しても遅い。自分から足を踏み出したことなのだから。航は噴水奥にある緑色の店に足を運ぶ。

天国への入り口。

ドアを開けると昨日とは変わらない光景が広がっていた。

相変わらず、中を見ると気持ち悪くなりそうだ。

カウンターにいる店員はグラスを拭いている。

「どんな御用ですか？」

カウンターに近づくと、店員が問う。

「あ、あの……下に行きたいのですが……」

緊張して声が震える。

通してもらえるだらうか？

「畏まりました。ではこちらへ」

店員はあっさりと案内してくれた。奥にある隠された扉。

「いつてらつしゃいませ」

その言葉と同時に扉が開く。

店員は笑顔で航の背中を見送る。

開かれた先にある暗い、長い階段。

一段…。また一段とゆっくり降りていく。

下に行くにつれ、脚や手が震え、心臓の動きも早くなる。

一人で来なければ……。一瞬、そんな思いが浮かんだが、すぐに首を横に振る。

自分勝手な行動で踏み入れたのだから自分で何とかしないと駄目だ。

歯を食いしばり、階段を下りだす。

明かりが見え、航は一階へと来た。

昨日と全く変わらない光景。

コインの流れ出る音、ルーレットの玉が流れる音、カードをシャツフルする音、笑い声。

外で見られなかつた分、満席になるくらいの人の数。

それにも女性の姿が見当たらない。

貴婦人のような人がいてもおかしくはないはず。

気にはなつたものの、航は昨日迅速と訪れた奥の部屋に向かう。

「……？」

辺りを見回しながら歩いていると賭け事をしている者たちと目が合つ。

それも一人や二人ではない。

擦れ違つたびに幾ど……いや、全員が此方に顔を向ける。

気のせい…？ ではない。

不気味に感じたが今はそれどころではない。

航は気にせず、奥にある部屋へ向かった。

薄暗い通路の先にある金属製の扉。

ここに、勇人がいる。

航は躊躇うことなくその扉を押し開けた。

ギィイイ。

やはりこの音には慣れないと。

扉を開けると部屋の中を見回した。

中央には五つの椅子にテーブル。そこに男が五、六人。

しかし、勇人と思える人物の姿が見当たらない。扉の音に気づいた男たちは航を見つめていた。

すると、一人の男が笑みを浮かべ、航に近づく。

「なんか用かな？」

男は航のそばに近づくと笑顔でそう問い合わせる。それに対し航は危険を感じて一、二歩後退りする。

「勇人は……？」

「勇人？ あー、今どこかに出かけてるかなあ」

「どこに？」

「さあなー。なんで勇人に会いたいんだ？」

「わかりました。もう結構です。失礼します」

航は勇人がいないと分かると男の問いかけを無視し、一秒でも早くここから出ようと踵を返す。

「おい待てよ」

腹立たしい態度に男は航の肩を強く掴む。

「離せッ！」

航は掴まれた男の手を振り解き、急いで駆け走る。通路から広間へ。

「おい、そいつを捕まえろ！」

後方から追いかけてきた男がそう叫ぶ。

すると、先ほど賭け事をしていった全員が航の行く手を阻む。それも笑みを浮かべて。

（この文は途切れています）

「残念でしたー！ 君はもうここから出られまっせーん」

近くにいた二人組みが航の腕を片方ずつ掴み、自由を奪う。部屋から追いかけてきた男が近づく。

脚は抑えられていないので腕を振り解けば何とかなるだろう。だが、この状況では逃げることは不可能に近い。どうすればいい……。

蛭谷から汗が流れ落ちる。

「ああて、これからどうじよつか？ 顔良いし、殺すのは勿体無いよなあ」

男はそう呟きながら航の顎に人差し指をやり、その指を下に擦り落としていく。

顎から胸へ。胸からお腹の中心に。

指は臍の辺りで止まる。

「みんなこいつをどうしたい！？」

男は周りを見回し、やう叫ぶ。

「「食え！ 食え！」」

周りにいる者は皆、同じ言葉を何回も繰り返す。

男は笑みを浮かべて航を見つめる。

「だとよ？」

耳元でそう囁き、航の首筋を舐める。

一瞬だけ温かく、気持ち悪い。

「や、めろ…」

「なに？ 感じちゃってるの？」

ぎらついた瞳に甘い声でそう問い合わせられる。

周りからは次という声が飛び交う。

「「食え！ 食え！」」

「それじゃあ、頂きますか！」

そういうと男は航の着ていた服を無理やり破き、白い肌が曝される。

綺麗な白い肌。

周りの者は見惚れて歎声を上げる。

「…こいつ、やべえ代物だ」

男は航の曝された部分を見た途端、野獣の目みたいに大きく見開く。

それを田の当りにした航は恐怖を感じ、必死に心の中で助けを求んだ。

男の手は、航の胸に触れる。

「……ツ！」

出そうとしてもいのに変な声を発してしまつ。

「感じるだろ？」

耳元に甘い声が囁く。

男は同じ行為を何度も繰り返した。

「……めて、くれ

「なに？」

「や、めろツ！」

「フツ。やめるわけねえだろ」

厭らしい手は下に擦り落ちていく。

指でなぞられたところからゾクゾクと鳥肌が立つてくる。

男の手はやがてベルトの方に。カチャカチャと音が聞こえだす。

「やめ ツ！？」

抵抗の言葉を出す瞬間に、何者かに口を押さえつけられて声がこもる。

息がしづらぐ、咽せそうにもなる。

視線を下に向けると、ベルトが外れ始めていた。

男はゆっくり、スルスルと航の身に着けているベルトを外していく。

勇人ツ！ 迅速ツ！

両腕を掴まれ、声も出せない状況の中、航は一人に助けを求めた。

「ぐあつ！」

塞がれていた口元の手が外れ、すぐそばから声が聞こえたと思うと、腕を掴んでいた二人の男が倒れ出した。

航は身体が解放され、目の前の男に蹴りを入れる。反動で男は地面に倒れ込み、航は逃げる体制に入る。しかし、相手が多い。

どうしたら……。

「走るぞ！」

そう声が聞こえたと同時に、何者かに腕を掴まれ引っ張られる。

振り解こうにも掴んでいる手の力が強すぎて逆に力が入らない。航は引っ張られるがままその速度に足を合わせ、裏口から店を出した。

「ちょっと待って」

航は掴まれている手を振り解き、息を整える。

突然の相手のペースに足を合わせ、息が辛かつた。

「立ち止まるな！ 追っ手が来る！」

店から出られて助かつたと思ったが、忽ち腕を引っ張られ、グロウ・プラザから抜け出す。

十数分ほどして街に出る。

やつと掴まっていた手が外れ、解放された。

あまり運動をしていなかつた所為か、体力の限界で息が上がり咽がせる。

「はあ、はあ……」

「悪いな。急がせてしまつて」

航は疲れながらも顔をあげ、目の前にいる人物の顔を確かめる。つい、迅速が助けに来たのだと思っていたが勘違いだつたようだ。男の顔は見知らぬ顔で、三十代前半にみえる。

薄い青色のスーツに迅速と同等の高身長。

この人は一体……。

何がなんだか理解できない。それを察知したのか男は口を開く。

「すまない。私の名はリオナール・ウォルト。特殊部隊の一人だ」

トーンの低い声。

リオナール・ウォルト。外国から来た者だろうか？ それよりも、

「特殊部隊？」

「ああ。しかし、詳しいことは言えない。秘密組織だからな」

秘密組織。

その言葉に何か不安を感じた。

航はリオナールに質問する。

「あの、何であんなところに居たんですか？ それに、俺を助け

てくれたの？」

「言つたろ、特殊部隊だと。潜入捜査だ」
リオナールは腕を組んで答える。

「潜入……」

「君が襲われたあの時、ここらの連中ではないと気づいたのでね。
だから襲われている君を助ける為に連中等の仲間のふりをして君の
側に近づいたんだ。息、大丈夫だつたかい？」

先ほどのことが脳裡に甦る。

あの時、口を塞いだ人はこの人だつたのか。

「どうやら君はあそこの連中に目をつけられているらしい」

「え？」

「グロウープラザだよ」

「あ、はい……でも、なんで俺が……」

航は考える。

どうして俺が目をつけられているんだ？

昨日、迅速と来た時は何もなかつた。

でも、今日は違つた。

なぜ……？

「詳しいことは私にも分からぬが、… そついえば君は何故あん
な危険なところへ来たんだ？」

不意な質問に戸惑う。

もしかすると、この人に訊いてみると勇人の事が何か分かるかも
しれない。

でも、特殊部隊という言葉が引っ掛かる。

「別に……、ただ入つてみただけだよ。そつちは何の潜入捜査なの

？」

航はちゃんとした答えを返さず、逆に問い合わせる。

「私が？ うーん……」

リオナールは自分を指さすと、顎に手を当て考え事の仕草をする。
やはりこれも極秘なのだろうか。

数秒した後、男はゆっくり顔を上げ口を開く。

「勇人という男を捜している」

「なん、だつて…？」

その言葉を聞いて、驚きを隠せなかつた。

なぜこの人は勇人を探しているんだ？

今さつき男の言った言葉が浮かび上がる。

秘密組織

まさか、…警察！？

終業式の時、まだ警察は勇人を捜していると耳にした。

「どうした？」

航の様子が気になつたリオナールは問い合わせる。

「あ、いや。なんでその勇人つて人を捜してるの？」

「ん？ ああ、ちょっと会つてみたいと思ってね」

「会つて何か意味あるの？」

「君は相手を問い合わせるのが好きなようだな。もしかして、君もその男を捜しているのではないのかい？」

気づかれた。

航は混乱して何も言い返せなかつた。

その様子を察したリオナールは口を開く。

「なら、私と一緒に捜さないか？」

リオナールにそう言われ、困惑する。

もし、この人が警察だつたら？

それだけが頭の中で引っ掛かつていた。

「あんた、警察だろ！ 勇人をどうする気だ？」

リオナールは警察と言われて驚いたのか、目を大きくする。

「フツフツ。君、おもしろいね。私は特殊部隊の一人だが、警察とかそういう類ではない。ただ勇人という男と会つて話がしたいだけだ

けだ」

「…話？」

「ああ。だから君も協力してほしい」

警察ではない。協力すべきか。

しかし、この男は何か企んでいるのではないか？
でも勇人に会いたい。

会つて、"本当の事"を訊き出したい。

リオナールといれば勇人に逢えるかもしない。
航はリオナールを信じてみることにした。

「明日の昼にここで落ち合おう」

リオナールはそう言うと去つて行つた。

「これからどうしよう。家飛び出してきちゃつたからな……」
航は独り言を呟くと、「はあ」と小さな溜息を吐く。

迅速に会つのが気まずい。……というより、ここはどこだらう？

それに、道行く人が変な視線で此方を見ている気がする。

「……ん？ 航……？」

どこからか聞き覚えのある声がした。

周りを見回すと、そばに誓の姿があつた。

「やつぱり。こんなところで何してるんだ？ もうあいつの話終
わつたんか？」

「え、ああ。うん」

誓の言つ"あいつ"とは迅速のことだらう。

航はさり気のない返事をする。

「つーかお前、その服どうしたんよ？」

「えつ？！」

誓に言われて氣づく。

あの時に破られていたことをすっかり忘れていた。

周囲の人が出していた変な視線はこれが原因だつたんだ。
今になつて恥ずかしさが込み上がる。

「そんなんじゃ上着あつても寒いだろ。俺の貸してやるよ

「あ、ありがとう……」

航は誓の貸してくれた赤い上着を着る。

「お前、あいつの家来るか？」

「そうしたいけど、道が分からないし……」

「おいおい。俺の住んでる場所昨日教えてもらつたんだ」

「そうだつたね」

誓が歩きだし、航もその後に着いていこうとした時、不意に誓の足が止まる。

「あー、そうそう。一つ言いたい事があるんだけど、忠告みたいなもんかな」

「？」

「てっきりさ、スカウト掛けられた人なのかなと思つたけど。お前、

”あいつとあんまり関わらない方がいい”ぜ

”あいつとあんまり関わらない方がいい”

迅速と関わりを持つなつてこと？

どうして……。いや、先程の迅速の話を振り返るとそう考えるのが普通だろう。

でも、それだと勇人まで関わりを持つなつてことになる。
それだけは絶対に避けたい。

誓さんの言う関わらない方がいいといつ言葉には、別の意味が込められている気がする。

航は、誓の後について行く。

今から話すこととは嘘のない本当の話…。

その時の彼の顔は今までに見せたことのない真剣な表情だった。これからどんな事を聞かされるのか。一瞬、聞くのをやめようかとも思うくらいに。

しかし、その人の真実を知りたいと思い、俺は耳を傾けた。

「よし。その前に、さつき言った事覚えてるか?」

「さつき…? いや…」

「お前が今高校二年生だろって聞いたときだ」

「…ああ。それなら覚えてるよ」

あの時は無我夢中で勇人の事しか考えていなくて迅速に当たつてしまつたが、今思うとどうして迅速はそんなことを聞いてきたのだろう。

「なら、今年か来年で十七になるんだろ?」

「そうだけど。なあ、それと今から話そつとしてる」として関係あるのか?」

「まあそんな急ぐな。航、お前は初めて俺を見たときひつ思つた?」

「なんでそんなこと…」

「いいから。答えてくれ

なぜこのような話になつているのかよく分からぬ。

俺は、ただ勇人の事を聞きたいだけなのに。

仕方なく迅速と会つたあの時を思い返す。

知らない場所に辿り着くと怖い人たちに出会い、襲われた。

もう駄目だと諦めかけた時、誰かに助けてもらつたんだ。それが

迅速だった。

あの時、声を掛けられた時に何となく温かいものを感じて、恐怖

というものが薄れていった。

初めて迅速を目にした時の印象は、襲ってきた奴らと何も変わらないと感じたけど、それは、俺の勘違いだったようだ。

「少し怖いって思つたけど、優しくしてくれて、大人だなあって思つた」

「そうか……」

「それが勇人の話と何か関係があるの？」

「……ああ。実は俺な、こう見えてまだ十八なんだ」

迅速は頭を搔きながら言う。

それを聞いた航は驚いて声も出せなかつた。

「今年で十九になるから……。つまり、高校卒業したてなわけだ。学校行つてねエけどよ」

「そう、なんだ」

「だから俺はお前らと一一つ歳がいつてるつてこと」

迅速はそう言つと手に持つていた写真を見つめる。

その写真を見ている迅速の表情に見たことのない小さな微笑みが浮かぶ。

懐かしさを感じているようだ。

穏やかな目つき。

本当にこれから話すことを俺は聞いてもいいのだろうか？ 別に過去の話なんて聞かなくてもいいのでは？ 俺は、無理に過去の話をさせようとしている……。

迅速の過去を無理に抉じ開けようとしている俺は、最低の人間だ。それは十分に承知している。だから、知りたい。勇人のこと。

無駄な考えはよそう。ただ前を見つめればいい。

数秒の沈黙。

迅速の口が開く。

「俺は中学に入った頃にはもう周りの奴らとは一一つ歳が違つていたんだ。歳がバレるのも時間の問題。噂になるまでそう時間は掛からなかつたさ」

迅速の表情に悲しみが生まれる。しかしそれは、すぐに微笑みと
変わる。

「でさ、そんな俺に唯一話しかけてきた奴がいたんだよ」

「その人つて……」

航が口を出したとき、迅速はゆっくりと航の口元へ人差し指をお
き、口が閉ざされる。

すると、迅速の目が真剣な眼差しに変わる。

「ここからが本題。約束、守れよ？」

口元にある指が離れる。

航は強い視線を迅速に送った。

周りには住宅も人の気配もない。

聞こえるのは、川の流れる音と風によつて靡く大樹の音だけ。
辺り一面、緑だけの草原。

人口の多い大都市でもこのような場所があるのだ。ただ、誰も知
らないだけで。

そんな場所に独り、迅速がいる。

迅速は草むらに横たわり、空を見上げていた。

青い空に白い雲。まさしく空つて感じだ。

時々吹く風が気持ち良い。

このまま目を瞑れば眠つてしまいそうだ。

迅速は横になつたまま、そばにあるバッグに手を入れる。
どこにある……。

無造作にバッグの中をかき回す。

あつた！一枚の紙の感触。

迅速はその紙を取出し、空へ上げる。

紙には表と、その上に時間割と書かれている。

「四月六日始業式。三時間でラッキー」

誰もいない中、独り言を呟く。

そう。今日がその四月六日で始業式のある日。といつても疾つくに終わっている。

「ほんと、ラッキーだよな！」

「どこからか声が聞こえた。」

迅速は紙を持っている右腕を下すと、そこに笑顔丸出しの男が立っていた。

驚いて声も出ない。

「なあ、お前あの後すぐに帰つたる。まだ学活残つてたんだぜ？」

男は何氣無い口調で話す。

灰色のブレザーに、誓のエンブレム。襟元には2・1の学年章が身についている。

同じ中学に通つている人。それに、同じクラス…か。

「…ああ、知つてる。面倒だから抜け出したんだ」

迅速は素つ気なく返す。

始業式が終わると教室に戻り、新しいクラスの仲間同士の挨拶。迅速にとつて、それは下らない事だった。

意味のないことをして意味がない。

だから、一時間目が終わると学校を抜け出し、この場所にやつて来た。

「ふーん。ここ、座つていいか？」

「え？」

「じゃあ遠慮なく」

何も言つてねエよ。つたく……。

男は迅速の隣り座ると腕を大きく上げて横になり、空を見上げてゆつくりと息を吸う。

川の音。風の音。草の囁き。靡く大樹の音。自然の匂い。平和な空。穏やかになる気持ち。

「良い場所だな。ここ」

隣りで男は小さくそう呟いた。

当たり前だ。ここに来たら誰だつてそんな気持ちになる。この俺
だつて……。

迅速は隣りの男の方へ視線を向ける。

男は目を閉じていた。

その表情は安らか。心に感じていることが顔に出でている
がわかる。

呼吸も落ち着いていて、眠っているようだ。

…といつが、本当に眠っている?

「おい。…おい、起きてるか?」

迅速は男の肩を揺さぶる。

すると、男はゆっくりと目を開けた。

「起きてるよ。本当に寝てるんじゃないかと思つたの?」

男は笑みを浮かべて起き上がる。

どうやら試されたらしい。

「なあ、お前名前は?」

「…何で言わないといけねえんだよ。言つても意味ねえし、知る
必要もないだろ」「

「馬鹿じやん」

「なに?」

「一つ年上の先輩に向かつて何だその口わ!」

生意気な口を利く男に苛立ちが込み始める。

「俺たちこれから一年間、卒業まで一緒にクラスになるんだぜ?」

同じクラスの仲間の名前くらい知る必要はあるだろ」「

それもそうだ。

しかし、俺は一年間ずっと一人でやり過ごしてきたんだ。周りと
歳が違うからって敬遠されて、それでも挫けずここまで乗り越えて
きた。こいつだってビラセビラジセ。噂を聞いて、からかおうとして
いるに違いない。

知る必要はない。

迅速が口を開こうとした時、男は迅速の目の前に手を差し出した。

「俺は、春藤勇人。よろしくな！」

男は満面の笑みを見せる。

なぜだか、こいつは他の奴らとは何かが違う感じがした。初めて話すのに気持ちが穏やかになり、許してしまつ。躊躇いさえも生まれなかつた。

迅速は恥ずかしさを悟られないように顔を背ける。

「俺は……、迅速だ」

そう言つと、目の前にある手を握つた。

勇人の方へ顔を向けると、その表情は……。

「へ？」

勇人は、ムッとした表情で迅速を見つめていた。
一瞬だけ握つた手に力が加わる。

すると、勇人は大声を出した。

「苗字もだよ！ 苗字ツ……！」

なんという駄駄

「わかつたからデカい声出すな。俺の苗字は、秋庭アキバだ」

「そつか。秋庭迅速……」

勇人は迅速の顔を数秒見つめると、立ち上がりつて再び手を差し伸ばす。

「これからもよろしくな。迅速」

温かい瞳に優しい響き

迅速は立ち上がり、もう一度、その手を握る。

「おう」

一人は目を合わせて、笑い合つ。

「そんじゃあ、これからゲーセンだ！」

「マジ？」

勇人は走り出して、手を振る。

「早く来いよー！」

「はあ。仕方ねえ。」

迅速は勇人の後について行くことにした。

四月七日、天気は晴れ。気温も日差しが強くて暖かく、春の匂いが感じられる。

午前七時十四分四十五秒。そろそろだな。

耳を研ぎ澄まし、部屋の外。つまり廊下の音を確かめる。コツコツという足音。馴れ馴れしい。

今日はいつもとは違う担当の者だ。

時計の針が丁度十五分を指した時、トントンと部屋のドアがノックされる。

返事をしなくてドアが自動に開かれる。いや、返事をする前に勝手にドアを開けられたと言つた方が正しい。

足音が一、二歩、部屋の中に入つてくる。

「あらひ。起きてましたか迅速お坊ちやま」

馴れ馴れしい口調で部屋の窓際に佇んでいる迅速に話しかける。若すぎる声。

迅速は振り向く。

部屋の前には黒いタキシードを着た、自分と同じ年代の若い執事が立つていた。

「ばあか。その服似合つてねえよ気持ちわりい。さつさと帰れ」

「なッ！！ お前、せつかく来てやつたのに何だその態度わ！」

迅速の口調に怒りを感じた執事は声を上げる。

「つーかさ、ジョウ。お前、学校どうしたんだよ？」

迅速がそう言つと、ジョウという執事は顔を顰める。

相当困つてこむよつだ。昔からの長い付き合いだから分かる勘がそう言つ。

ジョウは自分で迷いながらも口を開く。

「俺、学校やめたんだ」

「なんで？」

「それは言えない。だから今働き場所を探しててさ。まあお前と幼馴染だし、お前の父さんに言えれば雇つてもうれるかなつて」

「で、雇われたけどその『えられた仕事が俺の担当』……」

「そういうこと」

ジョウは苦笑いする。

それみた迅速は「はあ」と大きな溜息を吐ぐ。

なんという父親だ。

「なあ、迅速。俺たち、本当にこのままでいいのか?」

ジョウは不意な質問を迅速に投げかける。

「俺たちってなんだよ、”たち”って。お前と一緒にす、る、な!」

「そ、う、じ、や、な、く、て、よ、……」

「ああほり。執事は次に何するんだ? 朝メシ持つてくるんじやないのか?」

迅速はジョウの話を受け流す。

「はいはい、畏まりましたよ!」

ジョウはムッとした表情を浮かべると、声を上げて力強くドアを閉めて出て行つた。

足音が遠ざかっていく。

行つたか?

迅速は再び窓の外を眺める。

気持ち良い風が吹くと、悪い事も忘れてしまつ。でもそれは、あの場所でのこと。

ジョウの言つた言葉が脳内で再生される。

『俺たち、本当にこのままでいいのか?』

「…知らねえよ」

頭の中で話しかけられた言葉に返答する。

すると、トントンと軽くドアがノックされる。

早いな。

「やつさと入れよ」

部屋の外まで聞こえるような大きさの声で言ひ。

「失礼します。お坊ちゃん」

「つて、メエかよ……。てっきりジヨウ……いや、誓かと思つたぜ」

「ホツホツ。私は別に気にはしませんよ」

執事のメエは、配膳ワゴンに置かれた料理を迅速のすぐそばにあら学習机に並べる。

メエは俺が生まれる前からここで執事をしてゐるらしい。それも、祖父世代からの長い付き合いだという。

そもそもメエという由来は、俺がまだ小さかつた頃に執事を羊と勘違いして、その動物の鳴き声で呼び始めたことからそう呼ぶようになったのだ。それに対してメエは呼び名を付けてくれたことに喜んでいる。

時計を見るとまだ十八分。

学習机には、いつもながら机を埋め尽くすほどビの品々。

それに、今日はデザートがついている。

何か特別の日だったつけ？

「ところで、誓は？」

「一條さまならお帰りになりました」

「はあ！？ あいつ何勝手に帰つてんだよ。つーかもうこの仕事やめたのかよ！」

せつかく色々と命令させようと考えていたのに、クソ！

「ところでお坊ちゃん。お友達が訪ねて来ていますが」

メエがそう言つと、部屋の前から「よつー」という声と共に勇人が姿を現した。

「では、私は失礼致します」

メエは空になつた配膳ワゴンを押して部屋から出でていく。擦れ違ひに、勇人が部屋へと足を踏み入れる。

「うおつ！」

勇人は部屋にあるベッドに田を付けると、勢いつけて飛び込む。

「すげえふかふかじゃん！」

無邪気な子供のように、勇人は布団の中に潜り、顔を出す。

「おやすみ！」

「おいおい、一体何しに来たんだよ？」

「何つて……、迎えに決まって……る……」

スー。スー。

勇人はベッドが気持ち良かつたのか、来てすぐ眠りに入った。そんなことも気にせず、迅速は椅子に座つて、机に並べてある料理に手を付ける。

「いただきまーす」

「つておい！ 人が眠ったのに無視かよ！」

やつぱり。

「昨日のようにはいかねえよ」

「ちつ。ばれてたか」

勇人は脱ぎ捨てた靴を履いて、迅速の方へ寄る。

そこは、今さつき立っていた迅速の場所。

窓から外を眺めて、勇人は口を開く。

「うーん……やつぱり、あの場所の方がいいな」

あの場所。

それは昨日、俺たちが出会つた場所のことだろう。

俺も同じだ。

「そういうば、何でここでメシ食つてるんだ？」

不意な質問に迅速は黙り込む。

自動的に手に力が入つてしまい、動搖を隠せなかつた。

「すまん。言いたくなかつたら別に無理して言わなくともいいか

ら」

迅速の異変に気付いた勇人は先程とは違い、優しい口調になる。

「ただ、言えるなら言つてほしい。一人で抱え込むんじゃなくてさ、俺に打ち明けてほしい。友人として

その言葉は既に俺のことを見透かしていた。やはり、勇人は他の人とは何かが違う。

迅速の手から力が抜け落ち、苦笑いを浮かべる。

友人として、か。

「俺さ、小さい頃から一人なんだよ。親は一人とも仕事でたまにしか帰つてこねえし。広い食堂で一人でメシ食つたつて寂しいだけだろ」

今まで誰にも話さなかつた事を打ち明けた。話したところで意味がないからだ。しかし、何となく気持ちが楽になつた気がする。

すると、勇人がデザートの皿を取る。

「これ、俺が頼んだものなんだ。いただきまーす」

勇人はデザートのチョコレートケーキを食べ始めた。

ひとつ口、ふた口食べると手を止める。

「だつたら、友達を誘えばいいだろ」

よく分からぬが、勇人は少し怒つたような声で言つ。

その目は睨んでいるのではなく、訴えかけるような目。

「…友達なんて、いねえよ……」

迅速は目を逸らし、小さな声で口にする。

「お前はどこを向いて言つてる。ここに、いるだろ」

勇人は恥ずかしそうに小声で言つと、窓の外を向いて再びデザートを食べ始める。

その後ろ姿は、自分よりも大きな背中に見えた。

「これ超うめーじゃん！ これだつたら毎日来れるわ！」

「…デザートばっかり食つて、太るなよ？」

それが、迅速の出した返事だつた。

「おう！」

勇人は振り向きざまに笑顔を見せる。

「げつ！ 時間やばくね？ 一年始めの授業だつてのに遅刻か

「大丈夫だ。いつも車が”出る”から」

「車が”出る”つてなんだよ…。よし、走るぞ！」

腕を掴まれ、強引に引っ張られる。

「お、おい。まだメシ食つてねえし、バッグが」

「今日はどうせ話だけだからそんなんいらぬいって！」

二人は部屋を出て右側の長い廊下を走り、広い玄関につく。

レッドカーペットの敷かれた足幅の広い階段がある。その段数は

二十五段と十五段。

実はここまで来るより、部屋の左側を出たすぐ先にあるエレベータを使った方が早いのだ。

言うのが遅かった。

「お坊ちゃん、お車はどうなされます？」

階段を下りた先にいたメエが問う。

「今日はいいや。いつてくる！」

「いつてらっしゃいませ。お坊ちゃん」

二人は大きな扉から外に出る。

真っ白な雲の間に、青く綺麗に澄み切った空のある、広い世界に。

一瞬だけ視界が歪む。それは、太陽の光が一人に射し出したからだ。

アーチ状の門を出ると右の道をまっすぐに進む。太陽の上がっている方向へ。

車なら学校まで二十分程で着くのだが、大丈夫だらうか？

学校の門が閉まる時間は八時二十分。

現在時刻七時三十分。余裕、かな？

「ところで迅速」

「なんだ？」

「ここからどうやって学校まで行くんだ？」

おいおい。先頭を切つて走っていたのは何なんだ。迅速は呆れて額に手をおく。

いつも車で送迎だつたから何となくしかわからないが、

「こっちだ」

迅速は先頭に立つて走る。

「よーし、お前を信じるぜ！」

「ふざけんな、車の方が良かつたろうが」「たまにはいいだろ、『うううのもー』」

勇人は笑つて言つ。

なんだか先が思いやられるというか何というか……。でも、決してこういうのも悪くはない。

二人は走るペースを上げる。

……カーンコーン……。

チャイムが鳴ると、教室のドアが乱暴に開かれた。

そこにいた二人は息を『ぜえ』『はあ』と吐いていて、見た人は頑張ってきたんだな、と分かる。

二人はその場に崩れると、お互に顔を見合させてハイタッチを交わす。

すると、その二人に一人の女の子が近づいて声を掛ける。

「二人ともお疲れ様。てゆうか勇人！ 昨日なんですぐに帰ったのよ！」

女の子は勇人に指を差して声をあげる。

「あ、すっかり忘れてた。すまん」

「すまんじや済ませないわよ。放課後付き合つてもうからね！」頭に叩き込むかのように女の子はその言葉を勇人の耳に入れる。女の子は勇人の耳から手を離すと、その隣にいた迅速を見つめた。

「確かあなたが秋庭…迅速よね？」

その問いかけに迅速は小さく頷く。

「はいこれ」

胸ポケットから取り出して迅速に出したものは学年章だった。

なぜこの子が持つているんだ？

それを悟つたかのように女の子は口を開く。

「担任に頼まれたのよ。あいつ昨日途中で帰つたから今日の朝もし来てたら渡しといてって」

迅速は学年章を女の子から受け取る。

「来て早々だけど、一時間目集会だからあんたたちそこにいると邪魔よ。さ、廊下に出た出た」

二人は「ミミ」を扱うように押されて廊下に出される。

見た目は可愛い女の子なのに性格は鬼だ。

仕方なく、迅速と勇人は来た状態のまま、集会に出た。

一時間目の終わるチャイムが鳴り、教室へと戻る。そしてそのまま休み時間に入り、迅速は机に寝そべる。

「疲れたあ」

心の中で思った言葉が誰かが発する。

顔を上げると目の前に俺の様子を見つめた勇人がいた。

目が合うと迅速は笑みを浮かべた。

「なんだよ？」

「べつにー。なあ今日迅速ん家行ってもいいか？」

「お前、もう忘れたのか？ さつき女と約束してただろ」「ああいいのいいの。どうせ面倒な仕事を任せられるだけだから

「

「聞いたわよ。もし勝手に帰つたら殺すじゃ済まないからね」どこからか現れたさつきの女の子が歯ぎしりしながら勇人の耳元に聞かせる。

女の子は勇人の耳を強く引っ張ると、腕組みをする。途端、その右手が瞬間に迅速の目の前に置かれる。

「連帯責任。あんたも放課後残る事！」

そう言つて女の子は元いた場所と思われる後ろの女子グループの輪に戻つていく。

勇人の方へ顔を向けると、そいつは笑顔を浮かべていた。

こいつ。

怒りを通り越して溜息しか出でこない。

「ま、頑張ろうぜ！」

「何をだよ。つーか、あの子だれ？」

「知らんのか？ 輪音美織。一年の頃から校内でも有名だったと思つんだけど」

そうだったのか。

中学でも少ない、明るいブラウン色をしたロングヘアに大きな瞳。白い肌に声優並みの可愛らしい声。ピンクのワイシャツにオフホワイトのガーディガン。

一人だけ飛びぬけて目立つている。人気があつてもおかしくはない。

「てかあれ学校の校則めっちゃ違反してねえか？」
迅速は規則を破つているのか勇人に確かめる。

「そうか？」

「つて、お前も違反者か……」

忘れていた。勇人の髪色が金色だったこと。
この学校も質が落ちたものだ。と、思う迅速だった。

長かった六時間の授業が終わり、放課後に入ると、二人は昼休みのとき美織に指定された図書室へ足を運んだ。
部屋の中にはまだ数名の生徒が残つていて、その中に美織の姿もあつた。

そこで二人に下された命令は、古本の後片付けだった。

生徒の数が多いぶん、本の数も底知れない。外部の人からしたらここは図書館と呼べるだろう。

昨年度始末できなかつた本を校舎裏まで運んでほしいそつだ。
その数、数百冊。

昨年度の担当の奴らが相当やる気がなかつたように思える。見つけ出してシバいてやろうか

一人は面倒ながらも三キロ程の纏めた本を両手に持ち、合計一人六キロの荷物を校舎裏まで運ぶ。

一往復するのに八分も掛かり、最後のときには既に空はオレンジ色に染まっていた。

勇人と迅速は最後の荷物を校舎裏にある焼却炉のそばに置く。

「……はあ。美鬼め。許さん」

勇人が手をグーにして言う。

「美織だろ？」

「いや、美”鬼”だ。美しい顔した鬼

「聞こえてるわよー！」

勇人が話している最中、どこからか女のお鳴り声が聞こえた。
それは上方から。

二人は校舎の上を見る。

四階の図書室の窓に誰かがいる。

美織だ。

「すげえな。あんなところからでも聞こえるのか」

迅速は感心する。

「やつぱ鬼だから地獄耳 ッてえー！」

危ないと言おうとしたが遅かった。

四階の空からヒュンッと勇人一直線に分厚い本が飛んできて、頭に命中した。

命中力もズバ抜けてるな。

「あ、ごめーん！ それも残つてたのー！」

美織はそう叫ぶと窓から立ち去つた。

勇人は目を×にしながら倒れている。

「おい、起きろよ。大丈夫か？」

迅速は手を貸して勇人を起こす。

「ここは、どこ？」

「はいはい。帰るぜー」

「つておいつ！」

二人は学校の入口前まで戻り、迅速は校門に、勇人は教室に置いている荷物を取りに行く。

校門前で佇んでいる迅速は空を見上げた。

オレンジ色の空。

夕陽が雲に隠れているからか、色が鮮やかに見える。
そこに「羽の鳥たちが並んで夕陽へと飛んでいく。
その鳥を捕まえようと、俺は手を伸ばす。
でも、届かない。

伸ばした手を見つめて、昨日の事を思い返す。
あの場所で勇人と出会い、交わした手。
他の人とは何かが違う、優しい心。
これまでになかった思いが湧き上がった昨日。
これからも先、この思いがずっと続くといいな。いや、続けて見
せるさ。

「おーい。遅れですまん！」この女が「

「ちゃんど名前で呼びなさいよっ！」

来たばかりに一人は仲がいいようだ。

玄関から一人の姿がこちらに向かって駆けてくる。

「おまたー」

勇人は笑みを浮かべて言づ。

隣りにいた美織は迅速を数秒見つめると、手を差し出した。

「挨拶まだだつたわよね。私は輪音美織。よろしくね！」

「おう。俺は秋庭迅速だ」

迅速はその手を握り、口元に笑みを浮かべる。

「なにカッコつけてんだよ」

「「どこが……」」

不意に勇人が口にすると、一人は声を合わせて口にした。
「お一人さん息がぴつたしなようで…」

一瞬、美織と目が合づ。

すると美織は勇人の胸倉を掴み、声をあげる。

「あんたマジで殺されたいワケ……？」

「さーせん」

「はあ。なんというか、二人の仲についていける気がしない。
しかし、そんな二人のやり取りを観察していると面白い。

三人は校門から出て、色々な場所へ向かつた。

ゲームセンター。

ファーストフード店。

カラオケ屋。

どれも、時間を忘れるぐらい楽しんだ。

そう。時間トキを忘れるくらいに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7752y/>

Laco～僕らの運命～

2011年11月30日21時01分発行